

故非難を受けたかと申しますと、我々のいふ新體制といふものが各方面に互つて居つた。例へば、政治の新體制といへばこれは議會の方面に關係がある。經濟の新體制といへば、これは一般の實業界、財界方面に影響を與へた。官界の新體制といへば、これは官廳の方に關係がある。さういふわけで——かういふことを申上げてはいけないかも知れませぬけれども——例へば、經濟界の方に新體制といふことをお話し致しますと、官界の新體制、政治の新體制、それは非常に結構だ、是非ともさういふ風にしなければいけない、といふことを仰有る。政界の方に伺ふと、官廳の新體制は是非やらなければならぬ、經濟の新體制も必要である、とかういふことを言はれる。官廳の方にお話しすると、經濟界の新體制も必要であるし、政治の新體制は殊に必要だ、とさういはれるのですけれども、自分の所の新體制に對しては一向熱心に仰有らない。相互に共通點があるけれども、自分の所の新體制には反對だといふところにみな共通點がある。そこで私共は、要するに四方八方から攻撃を受けてしまつた。かういふ戦法は、私共が軍人の出身でないために戦争のやり方を知らないから、あゝいふ惨めな敗戦を受けたので、所謂各個擊破で、何處からか片付け

てゆくといふ行き方であればよかつたかも知れませぬが、兎に角一遍に新體制といふことを言ひ出したものだから四方八方から攻撃を受けて、御承知のやうに惨めな退場を餘儀なくされた實情であります。

しかしながら私共は、決して破壊のための破壊を考へたことも、革新のための革新を考へたこともない。新體制といふと如何にも危険思想のやうな、又、非常に世間を騒がせることのやうにお考へになる方もあつたやうでありますけれども、それなら、今の狀況はこれでもよろしいのかと聴くと、大抵の方がこれではいけないといふことに殆んど一致してゐらつしやつた。官僚の側に對しても、經濟界に對しても、又政治界に對してもさうであつた。そしてかういふ状態では、日本がいざといふ時、本當に國を賭して戦はなければならぬ時に、到底難關は切抜けれないといふのが各方面の意見であつたと私は拜承致します。私は、何も事を好んで敵を作つたりする氣持はありません。私も人間でありますから、無暗に人から憎まれたり悪口を言はれたりしては決していい氣持はしない。いい氣持はしないけれども、あの當時日本が立つて居つた状態から考へて、又、今日の大東亞戦争

なるものを多少なりとも豫見し得たとするならば、経済界も政府も議會も、政治、経済、行政、あらゆる部門に於て何かそこに新しい體制を作り上げて行く。さうして本當に日本が國を賭して戦はなければならなくなつた場合にも、國內をびくともせぬ状態に致さなければならぬといふ風に考へたのは、決して私共の誤りではなかつたと私は信するのであります。ただ私共の申し方が悪かつた、或はやり方が悪かつたといふ點はあるかも知れませぬけれども、私共は決して、何か變な思想を持つたり、變な考へ方をして新體制といふものを叫んだわけでもなければ、さうした運動を進めたいと思つたわけでもないのであります。私は、日本の政治狀勢といふものが、フランスの敗戦前の狀勢であつたと決して申すではありません。又、日本の政治家が、お互に權力争ひをしてゐるといふことを申上げるのでもなければ、日本の政治が腐敗して居つたと申上げるのでもございませぬけれども、日本の政治は今の儘ではいけないのだ。——「今の儘ではいけない」といふのは、今日のことではありません。それは大政翼賛會が起ります當時のことを申してゐるのであります。——その當時は、そのやうな狀勢で行つてはいけないといふことに多くの方の御意

見が一致して居つたやうに私は思ふのであります。従つて我々は、この大東亞戦争遂行の最中に於て日本の政治を益々明朗にし、これを正しき道に進めなければならぬといふことは申すまでもないし、又將來のことを考へて、永久に日本の繁榮といふことを考へまする時に、私はやはり、いつかは政治の新體制といふやうなものが考へられなければならぬ時が来る、と思ふのであります。その時に處するためにも、私共はもつと深くこの問題を探求致しまして、日本の政治の不變な確立を期して行かなければならぬと考へて居るのであります。

國の心といふ言葉はないかも知れませぬが、日本國民の精神、日本國民の心持といふやうなことは、それは、言へば言へないことはないんぢやないでせうか。私は、私共一人一人の心といふものが集結して集つたものが、即ち日本國民の一つの心だと思ひます。日本國民としての心構へと申しますか、精神と言ひますか、或は心と申しますか、さういふものがあつて、我々がそれを持つて行くとか、それにくつついて行くとかといふのではなく

して、我々の一人々々の心といふものが集つて、日本國民全體の一つの心になつて行く。そして、そこに集つたものが、つまり國の心であり、それは全體であつて一つであると同時に、一つであつて全體なのであります。

そこで私の申上げたいと思ふことは、このやうに考へますと、一人の國民の考へ方も、それは要するに全國民の考へといふことになる。今ここで私が、非常に間違つた考へを持つて、非常にいくぢのないことをしたと致します。すると、それが外國に知れ渡つた場合に、日本國民といふ者はかういふものだといふやうに、「日本國民といふ者は」として、事實は私一人の考へなり行動なりに過ぎないことなのですが、それが結局、國民全體のことになつてしまふのであります。勿論、その反對の例も考へられることは申すまでもありませんが、兎に角そこに私共が、個人としても一國民としても、總ての點に於て考へなければならぬことが尠からずあるのであります。

先般ドイツのヒットラー・ユーゲンと申しますドイツの青年隊の人々が、何人か日本に参りました。さうして、北は北海道から南は九州に至るまで日本の各地を視察致しま

して、いろ／＼なものを見たり聴いたりしてドイツに歸つて行つたのであります。その時に、このヒットラー・ユーゲントの青年隊のシユルツェといふ指導者が、この人は現在も日本に残つて居りますが、その人が、その若い人達の日本視察に先立つて與へた一つの訓示がある。——これは御承知の方もあると思ひますが、——お前達は日本に来て、日本の發達した工業とか、或は都會とかといふやうなものに眼を注いだり、さういふものを研究するといふことは必ずしも必要ではない。それはドイツに於ても十分に分ることだし、ドイツに於ても研究の出来ることなんだ。ただ、日本に来て見逃がしてならないことは、あの田圃の中で黙々として働いてゐる農民の姿と、それから神社の前に額づいて、そして出征兵士並にその村の人達がどうすれば君國のために御奉公が出来るか、どうぞ私にその御奉公を間違ひなくさせて頂きたいと眞剣になつて神様にお願ひをしてゐる、あの姿を見逃がさないやうに行かなければならない、といふことをシユルツェが青年達に訓示して居るのであります。

この言葉は、勿論私共としては別段事新しいものではありませんが、しかしながら一外

國人の言葉としてこれを考へまする時に、私共はその深い理解と洞察に驚くと共に、何かしら我々の心の中の間隙を不意に突かれたやうな感じを覚えずには居られない氣持が致します。

これに幾分關聯したことで、今思ひ出したので一寸お話し致しますが、東京の澁谷に民藝館といふ建物がございます。これは柳宗悦といふ哲學者として有名な方が建てたものでありますが、私はこの間或る座談會がありましてその民藝館に参りました。そして柳さんにその民藝館の中を案内して頂いて、その陳列品を拜見したのであります。それはどういふものが蒐めてあるかと申しますと、農村で作りましたいろいろな織物、染物、つまり農家が使ひまする夜具だとか、風呂敷だとか、さういふ本當に農村の方の使ふ極めて粗末な物ばかりを、北は青森から南は琉球に亘つてずつと蒐めたものが飾つてあるのであります。もう一つは瀬戸物でありまして、それは、例へば水甕であるとか、或は漬物の甕であるとか、或は醤油を入れる「とつくり」であるとか、農家が實際使ふ、値段からいへば一圓もするかしらないといふやうなものを各方面から蒐められて、それを立派に陳列してある

のであります。柳さんの話を聴きますと、ドイツの大使、今のオット大使もさうであります。この前のドイツの大使もここへ屢々見えた。私の所は日本の方よりも寧ろ外國の方に知られてゐて、外國人がよく見に来るといふことを言つて居られました。近頃は——殊にドイツあたりでは、日本といふものを非常に深く研究しようといふ熱が起り、就中、日本人の所謂精神といふものが、又日本民族の犠牲心と申しますか、さういふ方面が、一體どこから出て来るのかといふことを知らうとして、非常に努めて研究してゐるといふことは、皆さんのお耳にも入つてゐると思ひます。私はドイツの大使が、又その他の方々がこの民藝館に来て、その素朴な物の中から日本といふものを掴み出さうとしてゐることに非常に興味をそそられたのであります。私も、その民藝館に飾つてあるところの極めて粗末な、極めて單純な織物なり、或は瀬戸物なり、さういふ物を見まして、我々の生活の中にいかに多くのすぐれた藝術があるかといふことを、今更のやうに感じたのであります。そして、本當の日本の姿といふものが、さういふものの中に今日もなほ嚴然として維持されて居ることを知り、先刻も申上げたやうに、それが近代文化の名によつて、アメリカ式の

機械萬能主義によつて作られた、まるで何の意味もない、全然精神の入つてゐない硬質陶器のやうな物にそれが置き換へられて行くといふところに、日本固有の精神の破壊があるのぢやないかといふことを、しみじみ痛感したのであります。私共は、日本人たる我々の心といふ問題について、このたびの戦争下に於て、特に今一度振返つて見る必要があると思ひます。

先刻も申し上げましたやうに、アメリカやイギリスの影響を受けて我々日本人の固有の美點といふものが非常に損はれ、蝕まれたといふことはこれはどうしても見逃がすことは出来ませぬ。どうすればそれを元へ戻すことが出来るか。私は決して文化を戻すといふのはありませぬ。文化は益々高めなければならぬが、日本精神の本當に美はしいものをその中に維持して行くといふことが、大きな問題であると思ひます。私は哲學者でもなければ學者でもありませんから、どういふ風にもを言ひ現はしたらいのか分りませぬけれども、我々日本人の持つてゐる心の中にも非常にいいものと悪いものがあります。それは數へ挙げれば澤山あると思ひますが、昨晚ラヂオをお聴きになつた方がおありだと思ひ

ますが、私はラヂオを聴いて居りまして、何といふお方でしたかお名前は一寸失念致しましたが、「古事記と古語」といふ題で京都大學の方がお話になつたのを、私は伺つたんであります。その中で大變いいことを伺つたので、お聴きにならなかつた方に一寸申上げて見たいと思ひます。それは、言葉といふものが昔使はれた言葉と今使はれてゐる言葉との間にいろいろ言葉の違いがあり、日本ほどいろんな言葉がある國はないさうであります。人を呼ぶのでも「あなた」「お前」「貴様」など澤山ある。自分のことでも「僕」ともいふし、「私」「俺」ともいふ。その先生の言はれるのには、言葉の違いといふものを、單に言葉の違いといふことで見逃がすわけには行かない。その違つた言葉の中にはちやんと意味があるんだ。その心構へが違ふといふか、その言葉の持つてゐる意味に相違があり、それが最も問題なのである。一つの例を擧げて言へば、以前は御飯を頂くと言つた。それを今は、飯を喰ふといふ。御飯を頂くといふことも飯を喰ふといふことも、やることには變りはない。茶碗の中に御飯をついでお箸で喰へるといふことは、御飯を頂くと言はうと飯を喰ふと言はうとそれは同じことだけれども、御飯を頂くといふ言葉の持つてゐる心持と、

飯を喰ふといふ言葉の持つてゐる心持とでは、そこには非常な開きがある。その他にもいろいろお話をなさいましたが、非常にいいお話を聴かして頂いたと思ふのであります。

ところで、私は自分が農村問題に携はり、その側の人間でありますから、特にかういふことを申上げるやうにおとりになるかも知れませぬが、御飯を頂くといふのが本當だと思ひます。飯を喰ふといふのは如何にも何だか變な——變なと言つちや濟みませぬが、少し驕つた氣持だと思ふ。米は何處から來るんですかと聞くと、或る者は、それは田から米はとれるんだ。或る人は、米は田からとれるんぢやない、米屋からとれるんだ。かういふ話です。なるほど、飯を喰ふといふ方は、米は米屋から來るんだといふ考へ方、御飯を頂くといふのは、田圃の中から米は出來て來るのだといふことを知つてゐる人の言葉だ、と私は思ふ。勿論、何も食物ばかりが感謝の對象ではありませんから、御飯のことばかりさう喧しく言ふ必要は或はないかも知れませぬけれども、私共は、兎に角米を作つてくれる農民の辛苦、又天の恵みに對して、感謝の氣持といふものはつねにあつて然るべきだと思ふのであります。

ところが今申上げたやうに「飯を喰ふ」——まるで、自分の金で買った米なら誰にも御禮を言ふ必要がない。俺は俺の金で買ったんだから、飯を喰ふといふ。私は何故ここでかういふことを申上げるかと言へば、つまり私共は、一つの感謝の心、何事に對しても我々は、一つの感謝の心といふものをいつでも持つて居なければならぬ。我々は日常、朝起きてから夜寝るまで、又眠つて居る間でも、これは本當に誰かの世話になつて居るんだ——自分は自分の力で生活して居るんだといふ人がありますが、どんな金持でも貧乏人でも、自分は自分の力で生活して居るとはいふけれども、必ず誰かの厄介になつて居る。厄介にならなければ、我々は一日も生きて行かれないのであります。さうだとすれば我々は、誰にとは言へませぬけれども、つねに感謝の心持を持つて居ることは必要でもあり、又當然のことでもあると思ひます。

もう一つは同情といふことでありますが、日本といふ國は何事も支那から影響を受けて居りますから、言葉とか文字とかといふものは物凄く澤山あります。あるけれども、言葉や文字のある割に、實際の上にはそれが現はれてゐないといふことが尠からずあるやうに

思ふ。同情といふと、如何にも人に情をかけるといふやうな優越的な變なものにお考へになるかも知れませぬが、私の申上げるのはさういふ意味でなしに「思ひやり」と言へばいいでせう。つまり自分のことを考へると同時に他人のことを考へる、人への思ひやりといふものが私は必要だと思ひます。この間も私は、熱海から汽車に乗つて東京に歸りましたが、その時に、相當の年齢の女の人が私の直ぐ側に乗つて居りましたが、東京にその頃蜜柑がなかつたものですから、その女の方は熱海で大分蜜柑を買込んで来て、それをさかんに喰べてゐる。私は何も、人が蜜柑を喰べてゐるのにこつちがなかつたから悔しがつて旨ふわけではないのですが、その綺麗な着物を着た奥さんは、膝にハンカチを置いてその上で蜜柑の皮をむいて——それは着物に「しみ」がつくので、さうすると大損害で切符の點數に大影響がありますから、膝の上にハンカチを敷いてやつてゐる。それまではいいのですが、さてその喰べたふくろをどうするかといふと、一つ／＼通路に捨ててゐる。私はそれを見て、その女の方は自分の衣服を大事にすることには非常に氣をつかつてゐるのに、その通路を掃除する人が誰であり、その仕事はどうだといふことについては全然考へてゐ

ないことを知つたのです。

こんなことを皆さんの前で申上げるのはをかしいんですが、私はどつちかといふと割合に行儀がいい。それはいいわけであります。——今頃大名でもありませんまいが、大名の家には——私共の小さい時にはまだ昔の封建時代の遺風が残つて居りまして、行儀が悪いと叱られます。御飯を頂く時にはどう、お汁をのむ時にはどう、お魚のむしり方はどう、といふ風に、一々規則はないけれども一つの「しきたり」があつて、御飯を頂く時に足を横に出せばすぐ抓られたりして、非常にうるさい。それが慣ひ性になつて、今以て、物を喰べる時に汚したり散らかしたりすることは性質上出来なくなつた。どうもいやにお上品ぶつて、お大名はそんな形式ばかりやつて居るなどと人に悪口を言はれますが、私はかう思ふ。何故さういふ風に行儀を良くすることを喧しくいふかと言へば、これは要するに、他人に迷惑をかけないといふところから出發してゐる、と思へばいいんぢやないかと思ひます。一人の人が不行儀な、ふしだらな、出鱈目な態度を致しますと、誰かがその飛ばつちりを蒙らなければならぬ。汽車の中で、あゝやつて蜜柑の皮や辨當の皮やが山のやうに

なつたのを、失禮致しますと言つて掃いて行く掃除夫が居りますが、あれを私共は、何の感じもなしに見送つて居りますが、我々が所謂共同の社會生活をして居ります以上は、お互に他人に迷惑をかけないやうにするといふこと、これが私達の心構へに非常に大事な點だと思ふ。そしてみんながさういふ風にすれば、自然にさういふことはなくなつて行くんぢやないかと思ふのであります。

これは私が古くから話してゐる一つの事例であります。私は今から十五年ほど前に、労働學校を東京で經營致して居りました。その時分に私の學校に居つた一人の生徒が、それは街の工場の職工であります。それが或る日私に、校長先生、かういふことを私は見たんですが、校長先生、これはどういふことでせうと言つて私に話したことがある。それは、その男がお晝休みの時間に往來ばたに坐つて向う側を眺めてゐた。その工場の向ひ側に一軒の煙草屋があるのですが、その店先に、煙草屋の爺さんが火鉢を前にして坐つてゐる。すると向うの方から一人の躰がやつて來た。ぼろ／＼の着物を着て竹の杖をつきながら、遣ふやうにしてやつて來た。さうして煙草屋の前に來るとばたつと坐つて、懐の中に

手を突込んでお金を出しながら、煙草屋の主人に朝日を一つ下さいと言つて差出した。ところが、煙草屋の主人は一向手を出さない。金を受取らない。躰の方では、重ねて朝日一つ下さいといふ。するとやがて主人は、朝日はないと言つた。ないと言つてもそこにあるぢやないですか、と躰は指さしながら、棚にあるのを下さい、私は只で貰はうといふのぢやない、かうしてお金を出して買ふのだから賣つて下さい、と言つた。しかし煙草屋の主人は、どうしても手を出さない。そして最後にかういふことを言うた。「金はお前の物だらうが、煙草は俺の物だ。だから、賣らうと賣るまいと俺の勝手だ。お前が幾ら金を出して買はうと思つても、俺が賣らうと思はぬ限り煙草は買へつこない。俺は、兎に角お前には賣らない。欲しかつたらほかの煙草屋に行け」そこで躰と煙草屋の押問答が始まつたが、一方は上の方に坐つて居り、一方は下の方に居るのだからどうにもならない。とう／＼躰は諦めて向うの方に行つてしまつた。それを生徒が見て居つたので、私に、先生一體これはどうなんでせう。その煙草屋の主人の執つた態度は果していいものでせうか、といふ質問を私にしたのであります。

その時私が答へましたことをここで申上げて見たい。——これは私の意見になるかも知れませぬが、一體商賣といふものは、自分の生活の手段として物を賣り、その収入によつて自分の生活を維持するといふことでもありますから、これは公に認められてゐる公然な商賣には違ひないけれども、商賣といふものは、自分のため、自分の生活のためといふだけに許されて居るのではないのであります。同時に、他人に便宜を與へることによつて初めて商賣といふものは成立するのであります。自分の利益にもなると同時に、他人にも利益を與へる。煙草が欲しい者があつたならば、煙草屋に行けば買へる、かういふわけで、煙草の欲しい者にさういふ便宜を與へるといふことをやつて居るから、その煙草を賣ることによつて収入を得られる。これは社會と個人、他人と自分といふ點を考へて見れば明らかにさういふ關係に立つて居るものと思ひます。その證據と言つては甚だ變であります、そんならば、自分の利益だけで他人に利益を與へない商賣があるか。これを考へて御覽になつたら、あると仰有る方があるかも知れませぬが、私はないと思ふ。自分にだけ利益になつて他人に少しも便宜を與へないといふ商賣があるかと申しますと、私はないと思ひま

す。それは何と申しますか、損害を與へるものはあるかも知れませぬ。中には罐詰の中に石を入れて賣つて、相手に石を喰はせたりといふやうな、さういふこともなきにしも非ずでせうが、結局商業といふものの基本は、他人に利益を與へると同時に自分も利益を得るといふことでもあります。自分の利益と他人の利益が伴つて、初めて商賣といふものが成立つて行く。さういふものも、つまりは先に申しましたやうに、同情と申しますか思ひやりと申しますか、さういふものの上に立つて居るものぢやないかと思ひます。

もう一つ申上げて見たいことは、私達が物質の上に關して、或は精神の上に關して他人に優越したいといふ氣持は、これは誰にでもあるし又あつていいことだし、なければならぬことでもあると思ひますけれども、私は一般に、自分が他人より優越したいといふことのために手段を選ばなくなつて來てゐるといふやうな傾向が、近來特に著しくなつて來つたあるんぢやないかと思ふのです。何かといふとすぐ人を輕蔑したがるといふことは、これはいろ／＼な意味があると思ひますけれども、殆んどその場合、自分の優越感を満足させようといふことから出發してゐることが非常に多いと思ふ。兎に角自分の力で以て偉く

なり、自分の力で以て向上しようといふことだけではなか／＼旨く目的が達せられない。さうすれば恰度シーソーと同じやうなものであつて、自分だけがあがらうと思へばあがれないが、相手方がさがればこつちがあがる。だから、自分が成功するといふことは非常に骨が折れるから、誰かの足を折つて怪我人を多く拵へれば、自分は偉くならなくても上にあがれるといふことが、他人を輕蔑したり、他人を虐げたりする原因になるんぢやないかと思ふのです。

私の知つて居る人で非常に背の低い人が居ります。背の低いといふことは悪いことではない。太閤秀吉も背が低かつたし、大養木堂さんも背が低かつた。決して小さいことを氣にする必要はないわけですが、やはり普通から言へば極端に背が低いといふことは氣になると見えて、何時も背の低いことを氣にして、特に高い下駄を穿いて歩いて居つた。それが或る時私の所に参りまして、先生、今日は非常に面白かつた、愉快でしたといふ。どうしたと聞くと、今日實は僕が電車に乗つて吊革にぶらさがつて居つたところが、私よりも背の低い奴が居りました、とかう言ふんです。これは罪のない話のやうですけれども、何

處かに自分より劣つてゐる人がゐないかといふやうなことを探索してゐるといふと變ですが、さういふやうなことが私共の日常にはつねにあるやうに思ふのであります。

この頃は時局の影響で新聞といふものが非常に遠つてしまひましたが、従來の新聞記事といふものは、率をとつて見たわけではないから正確なことは分りませぬが、大體人を褒めてゐる記事よりも、人の悪口を書いた記事の方が紙面の多くの部分を占めてゐたやうに思ひます。私共に致しまして、何人か集つて人の話を致しますやうな場合、人を褒める話といふものは滅多に出ることはない。出れば一遍で終ひになつてしまふ。褒める材料も少いか知れませぬが、一つ今日は褒めつことをしようぢやないかと言つても、大抵二十分くらゐ経てば種が切れてしまふ。ところが、これから一つ誰かの悪口を言はうといふことになると、一時間でも二時間でも、いくら経つても種が切れない。如何に人間が他人の缺點に氣をつけて居るかといふことがこれでよく分ると思ひます。それではその人間がそんなに悪いかといふと、それに逆なことがないでもないのです。ところで、日本の雑誌などでみますと、人の悪口を書いたものよりは反對に褒めた方のものが成功して居る。例へば講

談社といふのは、野間さんの御意見で兎に角さかんに人を褒めた。いいことを褒めて人の悪口を叩かない。いいことを褒めるといふ建前で行つたのですが、教育上これはみんな安心出来るといふ點もあつたでせうが、それで非常によく賣れるといふ結果を招いた。だから我々の心の中には、善事を喜ぶといふ氣持と、人の悪口を興味がるといふ氣持をみんなお互に持つて居るのだと思ふ。一つの心が或る時は善に働き、或る時には惡に働くといふのは少し穩當を缺いた言ひ方のやうに聞えますが、兎に角我々の心といふものは、さういふ二つの面を持つて居ると思ふのであります。

もう一つ、これはある貿易會社の重役で、長らく海外に居られた方が、いつか或る座談會でかういふ話をされた。一體日本人といふのは頭のいい人種なんだらうか、悪い人種なんだらうかといふ、かういふ問題が出たのですが、するとその人は、それは君、日本人は非常に頭がいい。自分は貿易のことで随分各國人と會つて來たが、さういふ商取引についてはぬけて頭がいい。ところで、その次はどこかといふと、それはドイツ人でもアメリカ人

でもイギリス人でもない。日本人である。日本人も、さういふ點に於ては實に頭がいい。自分は確かにさう斷言出来る、とかう言はれて居つた。そこまでは非常に結構であります。が、そのあとが悪い。といふのは、「どうしてですか」と他の人が質問すると、その人はいふのです。「この頃の商取引を御覽なさい、どんなに喧しい規則が出て何が出ても、それを併とが滑つてやつてゐるといふことは、あれは日本人の頭のいい何よりも證據です」なるほどさう言はれて見ると、なかには作つた話もあるでせうが、随分いろ／＼な話を聞きます。

この間聞いた話なんですが、東京の或る奥さんが、東京市内で物を買はうと思つても殆んど手に入らない。そこで、とう／＼宇都宮まで買出しに出掛けた。ところが、宇都宮まで物を買ひに行つて歸る時どこかで調べられたら困るといふので、東京へ歸る時にはどこかの驛にお巡りさんが居つて調べられるといふやうなことはこつちで調べてある。決して上野とか、そんな所では降りない。日暮里なら日暮里で降りて山の手へ行く。新宿なら、新宿は危険だから大久保あたりへ行つて降りるといふやうに、とやんと奥さんが買出しに行

く順路から、何から何まで研究してゐる。かういふことが續いて参りますと、將來日本の男でも、殊に女の人などは、頭が非常に良くなるのぢやないかといふことを考へて居るわけであります。

さて、大分長くなりましたが、何故私がこんなお話を申し上げたかと申しますと、私も實は同和奉公會のやつて居ります融和事業といふものには、過去に於て相當長い間關係致して参りました。私は今日では、さういふ問題はあべきでない。又、なくなつて居ることを信じたいと念願も致してゐるのでありますが、不幸にしてまださういふ問題が全然なくなつてゐないといふことは、實に遺憾に思ふのであります。これは私は、誰がいいとか悪いとかと言つてゐる問題ではない。さういふことでなしに、今日、日本は大東亞戦争といふ大きな事業を——大東亞共榮國の確立といふ偉大なる事業に携つて居るのでありますから、さういふやうなお互國民の間での悪い感情とか行違ひとか、間違とかといふものは、これを機會に、戦争といふ大きな問題の中に溶け込ましてしまつて、一切を擧げてしま

ふやうにありたいと思ふのです。勿論これは心の問題でありまして、或は感情に基くものも多く、なか／＼その方面からの自覺であるとか、反省であるとかといふことは言つても容易には出来ないことも知れません。しかしながら、今日この大東亞戦争下に於て、國民が舉國一致戦争完遂のために協力して居るその姿をそのまま、從來の差別問題の上に持つて参りましたならば、解決出来るんぢやないかと考へます。苟くも國家のために一身を捨ててみんなが協力して行くべき時に、國內で、さういふ詰らない因習などに捉はれてこたやつてゐるといふことは、大きな耻辱であります。先刻も申し上げたやうに、たとへ一人でも間違つた考へを持つて居れば、それは外から見た時に、日本國民全體がさういふ考へを持つて居るかのやうに誤解される因になる。反對に一人でも立派な人が出れば、今度「日本國民は」として褒められる。いい方にしろ悪い方にしろ、私共一人々々の心構へといふものは、このやうに日本人全體、日本の國全體の上に大きな影響を持つて居るのだと思ひます。従つて、感謝の心とか思ひやりの心とか、或は他人を輕蔑するやうな心とか又は利己的な心とか、さういふやうないろ／＼な我々自身の長所、短所といふものについ

てよく考へましたならば、かういふ問題も、自らそこに解決される道がある筈であると思ふのであります。

本日は、恰も五箇條御誓文の記念日であります。私共はこの記念すべき佳き日に當り、新たなる信念と決意を以て、萬古不易たるこの御誓文の大御心を奉戴し、益々國威の發揚に邁進致したいと思ひます。皆様方の一層の御協力と御盡力をお願いしたいと思ふのであります。

(十七年三月十四日同和奉公會に於て)

大東亞戦争の教訓

このたびの大東亞戦争については、私も一個の日本國民としていろいろ感じて居ることがあるのであります。その中から二、三申上げて見たいと思ひます。

第一は、この大東亞戦争に於ける陸海軍の方々の奮闘を通して、日本精神といふものが如何に偉大なものであるかといふことを、私は今更のやうに痛感したのであります。これは外國の人達が、日本が今度の戦争に於て非常な戦果を擧げて居ることについて、それにはこの日本精神といふものが非常な働きをして居るのだといふことを知り、それではさういふものは、どこにどういふ形であるのかといふことを知らうとして頻りに研究して居るといふことを、私共は耳にするのであります。私は外國の人がさういふことに注意するといふことよりも、私共自身が、もう少し日本精神といふものの偉大さをよく見極める必

要があるのではないか、外國人が知らなかつたばかりでなしに、私共自身が、所謂日本精神の偉大さといふものを知らずに居たといふか、或はうつかりして居つたといふか、さういふ嫌ひが私共にはなきにしもあらずと思ふのであります。

かなり以前に聞いた話でありますが、或る學生の團體が霞ヶ浦の航空隊を見學に参りました。その時に學生の一人が飛行將校に「飛行機が飛んでゐる場合に、若し油がなくなつたらどうするか」と訊いたさうですが、するとその將校は「そら、日本精神で飛ぶんだ」と、かう言つて答へられた。この返事は、恐らくその當時の學生には理解出来なかつたであらうし、又それを聞いた私共も、實を申せばよく分らなかつた。普通我々の科學常識から申しますと、油があればこそ飛行機は飛ぶので、油がなくなつたら飛行機は飛べないんぢやないか、さう思ふのが私は常識だと思ひます。その場合に、日本精神で飛ぶんだと言はれても、あゝさうかと、本當に私共は理解出来ないと思ひます。かう申しては甚だ濟まぬが、どうも軍人さんの言ふことは亂暴だといふ風な感じさへ持たれただらうと思ひます。私自身も、實は稍さういふ風な感じを持ちました。しかし我々は、今日、あのハワ

イに於ける少年航空兵出身の若い操縦者達の勇敢な有様、又、その他の戦地に於ける日本の飛行將校の敢闘の有様を見まして、なるほど飛行機は油だけで飛ぶんぢやない。油がなくとも日本精神で飛ぶんだ。また實際戦争の場合は、飛行機は機械で飛ぶんぢやない。乗つて居る人の強い日本精神で飛ぶんだといふことを、私共は今日初めて知つたやうな氣がするのであります。この點、外國の人達が非常に注意して居ると言ひますけれども、私共は日本人として、寧ろそれ以上に自ら顧みてそれを知らなければならぬのではないか、とかう思ふのであります。これが先づ、私がこのたびの戦争について感じたことの一つの點であります。

それから第二は、ハワイの海戦を初め各地に於ける陸海軍將兵の擧げた非常な戦果について、日本の兵は世界無比の強い兵隊だ、非常に優れた民族だと、かういふ風に世界の各國がこれを認めたのであります。しかし、それに働いた人といふものは、必ずしも日本國民の全部ではありません。例へばハワイの海戦に於て特殊潜航艇でなくなつた所謂軍神は僅かに九人、また少年航空兵出身の人で爆撃に非常な戦果を擧げた人達も、決して何千

人、何百人ではない、僅かに何十人の人と思ひます。これらの極く少数の優れた我々同胞の奮闘によつて、外國人は何と言つて居るかと思はれます、日本人はえらい、日本人は非常に優れて居ると言ふ。私共は變な言葉か知りませぬが、さういふ少数の人の働きによつて、所謂非常な御馳走のお相伴にあづかつて居る形であります。我々一億國民の中のほんの一部分である極く少数の人の非常に優れた行動によつて、我々日本國民全體が、世界中から非常に優れた國民であり、民族であると認められるに至つた點に對しては、ただ我々は感謝ばかりしては居られませぬ。その英靈を慰め、又その光輝ある將兵を賞讃するといふことだけでは濟まないものであります、その極めて少数の人々に依つて高められた名譽といふものを私共はよく顧みて、我々もその名譽を分ち與へられたといふことをよく自覺して、これを辱かしめぬやうにすることが私共の任務であると思ひます。

この戦争が始まる前まで、私共は「近頃の若い者は……」といふ言葉をよく聞いたものであります。といふのはどういふ意味かと申しますと、如何にもこの頃の若い者はだらしない、元氣がない、しつかりしてないといふ意味でありまして、「どうもこの頃の若い者

は……」といふ言葉は、屢々老人の口から出たやうに思ひます。勿論それは、我々年配のものも若かつた時代と今日の若い者とを比べて見ると、確かにさういふ感じは私共にも持たれました。

ところで、安井治兵衛といふ方が書かれた「逞しき世紀」といふ本の中に、かういふことが書いてあります。或る日一人の大學生が電車の中で原書をひろげて讀んで居つたところ、一人の老人が來てだしぬけにその大學生を立たせて、そして自分が掛けるでもなく、その學生に對して今日の青年のだらしないこと、元氣のないことを罵倒せんばかりにその老人が説きたてた。黙つて聽いて居つたその學生は、自分の下車する停留場の近くになつて丁寧にその老人に挨拶をして曰く、先程からのお話はよく分りました。私共の参考になるべきことも多々ありました。しかしながら一言申上げて置きたいことは、あなた方お年寄と我々若い者との間には本質的に違つたものがあるといふことだけは御承知置き願ひたいと言つて、帽子を脱いで挨拶をして降りて行つた。それを見た多くの人は、その學生の態度なり、その言ふたことに對して大體は共鳴をして居つたやうに見えた。本質的に

違ふといふ意味は果してどういふ意味か分らぬが、兎に角その學生の言ふたこと、取つた態度は好感を以て一般の乗客に迎へられた、といふことを書いて居られます。

私共がよく、この頃の若い者はだらしがない、元氣がないと言つて非難する場合に、いつも引合ひに出されるのは明治維新であります。明治維新を見ろ、みんな二十年臺の若い志士が起つてあの大事業を成し遂げたんだ。この頃の若い者は何をして居るんだと、直ぐに明治維新を引合ひに出して今日まで参りました。然るに、今回の大東亞戦争に於て、ハワイ海戦を初め我國の非常な興隆の基を成して居る幾多の大戦果は、果して誰がやつて居りますか。誰がやりましたか。勿論全國民の努力には違ひないが、御承知のやうに僅か二十數歳の少年航空兵出身の飛行將校、その他極めて若い現代の人々、陸海軍の人達によつてこの大きな戦果が擧げられて居ります。今日のそのみを以て今の青年はどうだとか、若い者はだらしがないとか言ふことは言へないかどうかは知りませぬが、山本提督が「今の若い者は……」といふ言葉を遠慮せよと言はれたやうに、私は現代の青年達の中にもさういふ人が居るといふことを、今更ながら感ぜざるを得ない。明治維新の時にも若い志士

があの大事業を成し遂げたんだと言ふが、それもやはりあの時代のほんの一部分の人があといふ仕事をやつたのである。例へば吉田松陰にしてもその他の誰にしても、傑出した當時の青年志士といふものの數は決して多くありません。その時代の青年から考へたら極めて小部分であります。今日の場合でも同じでありまして、現代の青年は非常に澤山居りますが、しかしこのたびの大東亞戦争に於て非常な功績を擧げた若い者といふのは、極めて一部分のものに過ぎませぬ。でありますから、全體を眺めると、何やら今のは元氣がないと言ふにしても、その中で極く少數の優れた人が居つたら、その時代は率ゐられて行き、改められるといふことを、私共は知ることが出来ると思ひます。

しかしながら、さうかと言つて決して年寄を無視することは出来ませぬ。我々はさういふ風に若い人達の優れたものを認めると同時に、それが果してどういふものによつて培はれ、養はれて来たかといふことを考へるならば、私共は現代の年寄も亦、尊敬しなければならぬと思ひます。米内大將がハワイ海戦の直後に、あの戦果は、山本五十六大將が司令長官であるが故に爲し得たと自分は思ふ。現在の海軍の所謂司令長官中で、山本提督ぐら

の日本海軍の航空力を知つた人はない。又、航空將兵といふものがどういふ働きを爲し得る力を持つて居るかといふことを十分に承知して居るのも、山本大將以外にない。山本大將は、日本海軍の航空の生みの親ともいふべき人である。霞ヶ浦もさうであり、航空本部もさうである。海軍の航空の發達は山本大將によつて養はれ、育てられて來た、といふことを米内大將が言はれたさうであります。やはりかうした偉大な仕事の蔭には、それを育て、それを養つて來た人があるといふことであります。明治維新でも同じである。私の郷里に於ても、早く亡くなつた眞木和泉守を初め、所謂維新の元勳を説いて起ち上らせた蔭の人が大勢あつたことを承知して居ります。従つて「現代の若い者は……」と、徒らに非難したり、輕蔑することは出来ませぬ。いつの時代にも優れた少數の人が居り、又、これを育て上げた多くの功勞者があるといふことが、この戦争を通して感じた一つの點であります。

第三は、この大東亞戦争はどういふことによつて起つて來たかといふことであります。これは皆さんも御承知の通りで、いろ／＼な事情があらうと思ひますが、戦端の開かれる

直前の日本と外國との關係、例へばイギリスとの關係、アメリカとの關係、支那との關係を考へたら、その大體は、日本の國の存立に關することから起つた問題であります。しかも存立に影響のある大きな問題は、資源の點であると思ひます。然るに、この大東亞戦争の戦果によつて我國が最も悩みとして居つたところの資源の問題は、これによつて全部とは言はぬが、大部分片付き得る見込みが立つたと思ふのであります。この日本が、持たざる國から一つの持てる國に成り得たといふことも、陸海軍將兵の非常に大きな犠牲の賜であると思ひます。然らばこの資源を活かし、さうして日本を興隆の道に向はせることは誰の役目であるか、申すまでもなく私共が共にこれを爲し遂げなければなりません。我々は陸海軍將兵の非常な犠牲によつて、今日まで安全に居られる。しかも、日本の悩みであつた資源の窮乏をもこれによつて救ふことが出來たとしたら、私共はこれを本當のものにして、その多くの犠牲を無にしないやうにすることが、私共に與へられた一つの責務であると思ふのであります。

又もう一つの點は、所謂東亞諸國、東亞諸民族の解放並にその繁榮、かういふことを實

現し得る一つの機会がここに與へられました。勿論、これを一つの目標としてこの戦争が起つたのに違ひありませんが、しかし私共日本の國民としては、この東亞諸民族の解放、東亞諸民族の繁榮といふこの重大な事業を前にして、これを本當にその目的通りに果すか果さないか、これを成就せしむるかせしめぬかといふことが、又、私共に與へられた大きな仕事であらうと思ひます。これを私共は非常に光榮だと思ひます。我々が非常に努力しなければならぬといふことは、一つの苦しみであるかも知れませぬが、しかしながら我々は、かういふ光輝ある時代に生れ、かういふ偉大なる仕事の一端を荷ひ得ることを光榮とし、喜びとしなければならぬと思ひます。その中に於てもいろいろあらうと思ひますが、例へば軍事上のこと、或は政治上のこと、さういふことは暫くその方面の人々に委せるとしても、我々が東亞諸民族の繁榮の上に直接致さなければならぬものは、文化と經濟の方面だと思ひます。少くともこれらの諸點については、私共はみな力を合せて、それ／＼の立場に於て全力を盡して行かなければならぬといふ風に考へるのであります。このたびの大東亞戦争について私の感じて居ることはまだ他にもいろいろありますが、主な點だけを

申上げて見ますと、大體以上の四つのことであらうと思ふのであります。

そこで、大東亞共榮圏の確立といふ問題であります。戦争が滞りなく満足に進展したと致しましたら、それから後は共榮圏諸國の所謂解放、繁榮、これをやらなければならぬ。これは非常に大きな仕事でありまして、戦争の目的も實にここにあるわけでありまして、それだけに私共は、それをどうしてやるかといふやうなことを考へる前に、先づ注意しなければならぬ一つの問題があると思ひます。それは、假にイギリスを一つの例として考へます。イギリスの發展して來た歴史といふものは、同時にイギリスが滅亡に向つて行つた歴史だつたといふことになるのですが、その點を私共はよく注意しなければならぬ。私共日本は、絶対にその轍を踏んではならぬといふことであります。

産業革命以後百年足らずの間に、イギリスは非常な發展をしました。しかしイギリスが今日、世界にこれほどの大きな力を獲得するまでには、決してそんなに長い期間は要しなかつたやうであります。私は自分が農業の専門でありますから、或はこの方面から問題を見る傾向があるかも知れませぬが、産業革命後イギリスにはいろいろ工業が勃興しまし

た。その時にイギリスは、これによつて大を成さうといふので、大體その方針を執つたやうに思ひます。そこで問題は、如何にしたら生産費を安くし得るか、である。生産費を安くするには、食糧を安く手に入れることが必要であります。労働者の賃銀の點、或はその他いろいろの點から考へて、食糧を安くすることがイギリスの産業勃興の重大な要素になります。そこで行はれたのが、一八四六年の穀物條例の撤廢であります。それ以前はイギリスは、自國で國民を養ふ食糧を生産しました。そのためには高い關稅をかけて外國から小麥の入るのを防いだが、それでは工業が發達しないから、穀物條例を一八四六年に撤廢したのです。それ以來自由貿易主義で非常な發展を遂げて参りましたが、その蔭に何があつたか。イギリス農業の極端なる没落があつたのであります。一八四六年の穀物條例撤廢以來、イギリスの農業は少くとも穀物農業は駄目になつて、イギリスの耕地は全部草原になつてしまひ、牛を飼ひ羊を飼ふ、さういふ家畜を飼ふこと以外に用はなくなりました。さうして遂に、イギリス國內で生産する食糧品では國民を僅かに二箇月しか支へ得ない状態にまでなつたのであります。その後十九世紀の半から今日まで約百年の間、これではい

かぬといふので、イギリスは農業の復活について非常に努力しましたが、一向復興が出來ない。今日もなほ僅かに十何%くらゐしか養ふに足らない。イギリスが、あの澤山の屬領なり植民地、世界の各地に亘つて老大な土地を所有し、さうして一面に大きな海運力、あの海軍を持たなければならぬのはどこにその原因があるか。勿論工業の發達によつて自然にさういふ風になつたのもありますが、食糧の確保からいつたら、それなしではとても不安で居られぬのであります。私はイギリスの歴史、特にイギリスが勃興して來た百年、二百年の間の歴史を見られて、その裏をひつくり返して見られたら、恐らく何人も、當時既に今日の没落を來す衰亡の原因があつたことに氣付かれるだらうと思ひます。

いま日本は日の出の勢ひといふか、非常な興隆勃興の時であります。勿論我國としては將來ともなほ悲觀すべきものはありませぬが、イギリスの例を考へて見る時に、我々はその轍を踏まぬ用心を今からする必要があると思ふのです。人間個人としても、上り坂の時、調子の良い時には、兎角あとを振返つて用心することを忘れがちになるものであります。イギリスの興隆の歴史が衰亡の歴史であつたといふことを考へて見ても、日本の今の

状態、東亞に於ける日本の立場、状態を考へる時、我々は同時に、イギリスの轍を踏まぬやう注意しなければならぬと思ふのであります。

昨日汽車の中で、室伏高信氏の「椰子」といふ小説を読みました。その中に、同君がロンドンに居られた時イギリスに大きな炭礦の罷業があつて、その礦山へ罷業の状態を視察に行つたことが書いてあります。自分が炭礦に行つたところ、全部休んで居つてまるで死の街のやうな静けさであつた。一軒の炭坑夫の家を訪ねて、そこのおかみさんに會つていろいろ話を聞いたが、その時ふと眼についたのは一臺のピアノであつた。所謂資本家が押取するといふわけで労働争議の起つた炭礦に於て、一炭坑夫の家にピアノのあることを見て奇異に感じた。日本では、餘程贅澤な家でなければピアノは家に置かない。ところがその罷業をやつて居る坑夫の家にそれがある。そこでおかみさんに訊ねたら「いや、ピアノならどこにでもあります。坑夫の家にでも大抵一臺はありますよ」と、平氣で言つた。そこで同君が感じたことは、資本家が労働者を押取し、イギリスの炭坑夫は低い賃銀を高めてくれと言つて罷業をして居るけれども、その押取されて居る坑夫がピアノを持つてゐ

る。さうすると、日本の國民と比べたら、この坑夫の生活と日本人の生活には相當開きがある。さうした押取をする資本家は勿論富んで居らうし、押取されるものもこの程度の生活が出来るならば、資本家並に労働者を引括めたイギリスの國家は、どこから又押取して居らなければかういふことは生れて來ぬ。これはイギリス全體として、資本家、労働者を一つとして見て、どこからか押取しなければならぬ。その押取されるものはそれは誰であるか、東洋民族である。所謂東亞の憐れな民族が、イギリスによつて押取されて居るのだ、といふことを同君が書いて居られます。

私は東亞共榮圈諸國の共存共榮を考へる場合、日本の國の方針はそこにあると思ふのであります。それは單なる理想ではない筈でありまして、實際に、その理想を實現しなければならぬ。いくら筆や口で理想を説いても、それが實際に行へぬことであつては仕方がないのであります。で、今申しましたやうに、イギリスが今日の興隆をなした裏は衰亡の歴史であります。これは何によつてさうなつたかと言へば、それは今の話のやうに、自分の國の内では争つて居るが、國としては更に他の民族を押取して居つたといふことが、今日のイギリス

の滅亡の原因と思ふのでありますから、この點、所謂前車の覆るを見て後車の戒めとしなければならぬ一つの點であると思ひます。

もう一つは、先程も一寸申しましたが、外に發展する時代にはとかく内が疎かになりがちだといふことであります。これは勿論さうあるべき筈はない。日本は、東亞共榮圈確立のために努力するといふ國外的の仕事も重大なものには相違ないけれども、それは國內の本當の團結といふか、國內整備が全うしてでなければ、如何に國外に發展し力を伸ばさうとしても、やはりそれは不可能に終るのではないかと思ひます。私は大政黨賛會の當初に關係をしたものの一人であります。若し今日の情勢下に於てあの運動が起つたとしたら、恐らくあの時とは違つた形で生れたであらうと思ひます。總ては時代に即應しなければならぬ。決して時代を無視しては、あらゆる希望も計畫もない。従つて大政黨賛會でも、あの當時と今日とは違ふのですから、今日ではあゝいふことを考へもしなければ、實行もしなかつたと思ひます。しかしあの當時の日本の状態なり、諸外國との關係、世界に於ける日本の地位を考へたら、あの運動は、少くともあの時代には、あゝして進むことも決して

間違ひでなかつたと思ひます。

一言にして申せば、日本は今、外に非常に大きな問題を控へて居ります。日本の全體が全力を擧げて團結してこれに當らなければならぬ時、その時に一體國內の状態はどうか。政界を見ても、實業界を見ても、官界を見ても、このまゝの體制で日本は外に向つて大事業を爲し得るか、といふことを考へて、私共は、これではいかぬと當時思つたのであります。勿論、我々の考へが足りなかつた、遣り方が悪かつたといふ點もあつたでせう。不幸にして志の萬分の一も達せず、仕事の一部も出來ずに我々は敗退しましたが、しかしながら今日もなほ、今日の時代に即應して國內の體制を整へることは、外に發展する我々として考へなければならぬ、また實行しなければならぬ點であると思ひます。國內で致さなければならぬことは多々あると思ひますが、この會に關係した點について

二、三私の考へて居ることを申述べて見ます。

今日では綜合大學といふものがありまして、法・文・理・農・工・醫の各科が集つて一つの綜合大學といふものが出來て居るわけですが、しかし日本の綜合大學といふも

のは、さういふ風な各分科が一つの帝國大學といふものの中に集つて居るだけであつて、その各分科が本當に緊密な關係を保ち、それが本當に融合されて居るとか、綜合されて居ることはあまりないやうに私は思ひます。例へば外國の大學のやうに、學生はどの科の講義でも自分が必要だと思ふものを聴くことが出来るといふ制度でもあれば或は出来るかも知れませぬが、日本の綜合大學制から言つたら、大體醫科は醫科だけ、法科は法科だけ、工科は工科だけの講義しか聴かれぬといふ状態でありますから、綜合大學といつても各分科が一つの中にあるだけであつて學問的にそれが綜合されて居るとは言へぬのみならず、同じ醫科でも、内科・外科・皮膚科・婦人科などと幾つにも分れて居る状態であります。病人から言つたら、さういふ風に分れてゐては實は困るのであります。しかしさうかと言つて、一人で何でも診るといふことは出来ない。さういふ醫者が欲しかつたら、田舎の山の中へ行つたら居ります。田舎の山の中では、内科・外科・婦人科・小兒科、何でもやれる醫者でなければ勤まらぬ。それならそれが理想的かと言へばさうは行かぬと思ふ。でありますから、さういふ意味ではありませぬが、少くとも綜合大學といふものは、何とかそ

こに綜合された形體が必要ではないか。かういふ風な感じを私は大學の上で感ずるのであります。

それから、私も大學に暫く籍を置いたことがありますから感ずるのでありますが、大學の研究費といふものが非常に貧弱である。私の居りました農科などは殊にさうなのであります。例へば、畜産の教室で畜産に関する實驗が出来るかと言へば、それをやる費用がない。結局本を買ふのが安いから、外國の本を買つてこれを翻譯して講義したり、書いたりして居る。それで人が感心して居る。我々の知らぬ外國の人の名をつらねて、何といふものがこれを研究したといふ請賣、仲次ぎと言ひますか、さういふことで責を塞いで居ります。自分で研究するには費用がない。一匹の兎を解剖しようとしても手に入らぬといふ状態で、氣の毒といふか何といふか、随分憐れな状態であります。かういふことでは、私は、本當に學問の蘊奥を極めて貰ふことは無理な注文だと思ひます。學界の研究は、どんなものでも我々に關係がないならばいいのですが、さうした研究は、私共に直接間接に非常な關係を持つて居ります。それをただ我々は、今の大學の先生は難かしい理屈ばかり

言つて居つて役に立たぬなどと悪口を言ひますが、それなら我々が本氣になつてそれを援けて、本當に役に立つ學問の研究をして貰ふかといふと、それもせぬ。いはばお互に損になることばかりをやつて居ると思ひます。

私は寡聞で間違つたことを言ふかも知れませぬが、今日戦車に使ふ無限軌道、あれはもと日本で發明されたものだといふことであります。ところが、誰もこれを役に立たぬと言つて企業化せず、遂に外國に流れて出て、ドイツであつたかイギリスであつたか、戦車にこの無限軌道を使つて、今度は逆に、日本がそれを採入れてやらなければならぬことになりました。これは一つの例であります。その他の學者の研究の中にも、非常に偉大なものなのに遂に國內で容れられず、外國に流れて行つて、逆に向うから特許権を買ふやうなことがあります。と思ひます。

大分前でありましたが、「改造」の記者か編輯長かにお會ひした時、かういふことを私に訊かれました。私が内閣に居つた頃であります。が、「改造」に政治に関する論文が毎號載つて居るが、大臣方はあの論文をお読みになりますか」と質問されました。私は大變僂越

でありましたが、恐らく誰も読んで居らぬでせうと答へました。私自身も實はあまり読んで居らぬが、大臣で「改造」の論文を読んで居る人はそんなにありさうに思へぬ。讀まない理由、原因はどこにあるか。第一は閑のないこともあらう。普通の理由としてはさういふこともありませうが、もう一つは、讀んでも分らないといふことであらうと思ひます。「改造」の論文を書いて居るやうな現代の人、又それらの學者の方々の使ふ用語、物の言ひ表はし方と、大臣になつてゐる人が學問をして居つた當時と、大臣の年齢、頭から見ると、そこにかなり時代の開きがあります。ですから、讀んでも分らぬ字が澤山出て來る。言葉が分らぬばかりでなしに言ひ表はし方が分らぬ點もありまして、私は大臣ばかりでなしに、實際政治をやつて居るもので「改造」「中央公論」などの論文を讀んで居るものはあまりないと思ひます。甚だしきは讀まないことに理由を附けて、あれは學者が書いて居る評論であつて我々には用はない、などと平氣で言つて居る人が澤山あります。

一體良い頭を以て眞面目に研究して、意見を發表して、學界に、評論界に持てはやされて居るその論文が、實際政治をやつて居るものにはなんら無縁のものゝの如くになつて居る

ことは、それで果してよいものでありませうか。これは私は、考ふべき問題ぢやないかと思ひます。これは、一つは學者の方にも罪があるのでありまして、つまり學者の方々は、初めから今の政治家達にそれを讀んで貰はうといふことは考へて居ない。誰に見て貰ふかといふと、同じ學者仲間に讀んで貰ひたいのであります。さうして、あれは頭がいい、立論が正しいと言つて貰ふ、所謂玄人の間の批評なり評判なりに重きを置いて、一般の政治家達を度外視して居る。といふことは、日本の政治にかういふことを實現させようと言ふんでなく、學問的に政治といふものはかういふ風に考へる、といふ意見を述べて居るのですから、所謂仲間に讀んで貰つたらよいのであります。従つて、實際政治をやつて居るものも、あれは學者の理屈で、僕等の實際政治をやる上にはなんら参考にはならぬ、といふことになる。一體さういふことでよいのかといふことを、私はその時につくづく感じたのであります。

このことは、所謂政治學者や政治評論家と實際政治家との間に於けるばかりでなく、總ての方面にあると思ひます。經濟學者と實際の實業家、經濟人との間に於ても同様に言へ

ます。例へば日本の經濟、世界の經濟、また經濟學者の見た將來の日本の經濟機構なり總ての動向が、どうであるとか、どういふものでなければならぬかといふことを經濟學者が言ふても、實際家がそれに馬耳東風であることは日本の國のためにも採らぬし、又、實際經濟人もそれでは困ると思ひます。やはりこれも室伏君の本の中にありました。關西から出て居る或る中心的な實業家と室伏君が、歸りの船の中で問答して居ることを書いて居ります。それは室伏君が社會主義的色彩を持つて居る人として、室伏君に經濟に關する意見を聽いて居るのですが、これを見ると、自由主義がいかぬ、資本主義がいかぬといふ一方に社會主義が頭を持上げることには不安を持つて、どういふ風にしたら私は金儲けをさせて貰へる、どういふ風にしたら金が儲かるかと問うて居ることが書かれて居りますが、私がかういふところにも一つの缺陷があると思ふ。統制經濟、計畫經濟の時代には、今までの遣り方ではどうにもならぬ。どうしたらよいのか、かういふことを考へましても、實際のことに頭を使つて居る人々にはその悩みを打開する途がないと思ふ。さういふ時代にこそ私は、學者と實際家との眞の接觸、理解から、そこに一つの打開策が発見されて行くので

はないかと思ひます。

もう一つ他の違つた方面から言ひますと、國民生活と科學との問題であります。この頃國民生活の科學化といふことが言はれて居ります。我々も生活の科學化といふことは決して意味のないものとも思ひませぬが、多くの人は、生活の科學化の必要は感じて居つても、學者の研究や報告を聞いたからと言つて、或はラヂオで聞いたからと言つて、直ぐに生活に當嵌めることが出来ない。例へば脂肪、蛋白、含水炭素、ビタミンのA・B・C、或はカロリーをどのくらい攝かるといふことを聞いても、それだけではどうにもならぬ。つまり科學化は結構だが、その研究者のやうて居ることと實際にそれを使用するもの、それを喰べる我々消費者との間には何も連絡がない。生活の科學化といふのは單に自然科學化ではなく、そこには社會科學化もあります。言ひ換へて見たら科學的合理化であります。どうもそこがしつくり行つて居らぬのぢやないかと思ひます。でありますから、例へば人間の身體にはビタミンBが必要だと學者が研究したとしても、我々はそのBを何とかして攝らうとするが、どういふやうにしたらいいか分らぬ。そこで、その間にある

ものが一つの企業家であります。藥をつくるものが學者の研究したものを藥にして賣つたら、これを買ふことになります。例へばメタボリンがいいとなつたら、所謂企業家、製藥業者がこれをつくつて賣つて、我々がこれを買つて用ひたら身體のためになる。このやうに、何かその間に入つて繋がるものがなければどうにもならぬと思ひます。

變な話ですが、例へば食堂で、私共が脂肪、蛋白、ビタミンBを攝らうと考へてメニューを見ても、所謂さういふ營養素、科學的のものを攝ることは素人には出来ませぬ。その場合に、作る人が、その料理の皿の中に脂肪、含水炭素等を適當に配分してそれを表示して賣つたら、私共はその必要に應じてそれを買つて喰べますから、そこで初めて自分の身體に適したものを攝取したといふことになります。でありますから、ただ單に實際生活をして居るものに科學化しろと言つても、それだけではどうにもなりません。この中間に於て、何とか具體的のものにつくつてこれを與へるといふ方法を講じて下さる方がなければ、實際の上に於て効果が擧がらぬと思ひます。科學者と實際企業家といふものの間の關係も、これと同様のことが言へると思ふのであります。

ところが、經濟學者と實際經濟家、さういふ非常に近い関係のある間に於ても、今申しましたやうに殆んど縁の繋からぬのが實情でありますから、況んや自然科学といふ方面と實際經濟をやつて居る産業人との連絡がないことは、不思議ではありませぬ。不思議ではありませぬが、しかし、その連絡がよくなって果して本當の仕事が出来るかと考へたら、ここに非常に大きな損失があると思ひます。私はそれだからと言つて、決して科學者に、實際産業、實際企業に適應した觀點から學問の研究をしろとは言ひませぬ。又、動植物なりその他いろ／＼な方面を研究する人が、これは企業化出来る、商賣のたねになると考へて研究し、學問するといふやうなことは出来るものでもありませぬ。しかし、實際に應用の出来ぬ、企業化されないやうな學問でも、それが所謂學術的基礎になりますならば、産業人もこれに對して相當興味を持つべきであると思ふのであります。

作者は忘れましたが、この間の「日本映畫」といふ雜誌に、「靜かなり」といふシナリオが出て居ました。そのシナリオは、大豆から油を採ることを研究して居る眞摯な學者と、又それに對して多少意見は異ふが、同じく大豆から油を採ることを研究して居る今一人の

學者との鬭争を廻つての構想であります。そこに現はれる二、三の産業人が兩方の間を駆け廻つて、どちらが自分達の仕事としたら金儲けになるかと考へて、兩方を比較研究して居る場面があります。私は、學者の研究は所謂學者の研究であつてよいけれども、産業人にとつて役に立つか立たぬかといふことも、少しは念頭に置いてやるべきでないかと思ひます。私の知つて居る理學者は蘇鐵の精虫を研究して博士になりましたが、こんなのは企業化には役に立たぬと思ひます。蘇鐵の精虫を研究することは學問的に大事であり、それからいろ／＼と實際生活に必要なものが生れもするでせうが、實際産業に従事して居るものにはさして必要ではありませぬ。産業人は、蛙の腹をひつくりかへしてそこに筋が何本あらうと関係がないと言はれますが、さうしたことから、とかく産業人は學者に接觸する機會がなく、又、學問を尊重しなくなる一つの動機にならぬでもないと思ひますから、學者の方々も、もう少し實際に即した研究をなさるやうお考へになる必要があるんぢやないか、と私は思ひます。

近頃大東亞共榮圈の中では、ゴムが澤山あり過ぎて困るといふやうなことを聞きます。

それは今まで日本で使つてゐたものが少いから、それを基準にして考へるから餘るが、これも、使途を考へたらよからうと思ふのです。それについては、考へ方はいくらもありま
す。例へば、道路をゴムにすることもいい。馬の蹄鐵をゴムにすることもいい。馬の足の
裏に鐵を打つて蹄鐵を嵌めることは、これはコンクリート道路になる前に考へたことであ
ります。今日のやうに道路が殆んどコンクリートになつて、冬になれば撒いた水が凍つて
ひつくりかへることを考へたら、恐らく鐵は打たなかつたであらうと思ひます。第一、今
日は鐵がありません。私がドイツに居りました時、或る日荷物を挽いて居る馬が倒れた。
どうしても起きられない。幾ら足をかけようと思つてもコンクリートでかゝらぬ。そのう
ちに馬子が大きなズツクの袋を持つて来て、それを倒れて居る馬の足の下に敷き込んだ。
さうしたら、そのズツクで足掛りが出来て立上つたのを見ました。随分面倒くさい話であ
ります。アメリカで、馬の足にはかせる藁靴を考へて專賣特許を取つたものがあります。
日本では昔から藁靴を嵌めて居りますから、若しそのアメリカ人が日本で專賣特許を取つ
たら、侵害になるだらうと考へて居るのであります。

このやうなわけでありますから、ゴムは使途は幾らもあると思ふ。ところが、南洋から
持つて來ようと思ふと、船がないと言ふ。船がないからと言つてもわけはないでせう。ど
うするか、ゴムが餘つて居るのだから、ゴムで大きな袋を拵へてその中へ何か詰める。さ
うしてどうするかと言へば、これを黒潮に放り込んだらよろしい。さうすればひとりで
日本へ向つて流れて來る。これはよいかも知れぬ。まるでエスカレーターに乗つたやうな
調子で、太平洋をひとり流れて紀州沖に來るから、それを待つて居つてあの邊で引つか
けたら、みな取れる。まあ、さううまく行かぬでせうが、兎に角、これを道路に敷くこと
にしたらいと思ひます。

これは眞面目な話ですが、いつか海軍の技術員の方から伺つたことがあります。飛行機
が大きくなつて重量がかゝつて來るに従つて、一番問題になるのは、下の車のタイヤであ
る。あれは機體が大きくなるに従つて大きくなる。それがために今日では、あのバルンタ
イヤが一つの目方になつて居る。あれは、もとはもつと細いものであつた。ソリッドであ
つたが、近頃はだん／＼そのタイヤが大きくなつてその重味が機體にかゝつて來るから、

これを何とかしなければならぬ。あれ以上大きくすることは出来ない。結局は、今度は滑走路にゴムを敷いて、こちらの車を鐵輪にする。向うにゴムを付けてこちらに付けなかつたら軽くなる。さういふことを研究中だといふことでしたが、さういふもので、私は研究したらまだ方法は幾らもあると思ふ。しかし道路にゴムを敷いたら、その代り我々の草履を變へなければ危い。女の人などがゴム裏で歩いたら吸ひつくかも知れぬ。そんなことになつたら、そこへ立つたまゝで歩かせぬ。けれどもそれは考へやうによつていろ／＼工夫がありますから、ともかく利用方法を考へたらいと思ひます。學者の方にさういふ實際問題を採上げよとは言ひませぬが、しかしさういふ風になつたら、自然、實際の仕事をするものとの間の連絡が密接になることも當然と思ひます。そして、民間の人も出来るだけ學者の研究を利用し、これを奨めて行くやうに協力すべきであります。又、費用がないために研究が出来なかつたら民間の人がこれを援けて、お互に連絡を取ることが必要ではないかと考へます。

私はいつか、かういふ意見を政府に進言したことがあります。まだ公にはしませぬが、

どうも今の政治を見て居ると、良い政治には違ひないのですが、何か知らうま味がない。例へば、我々が税金を出す場合があります。税金を出すことは國民としての義務であるから當然であり、これを取るには、國家が必要あつて取るのでありますが、相當纏つた税金を拂ふ場合には、その税金が生きるやうに、又、出すものも快く出せるやうにすることが一つの政治上のうま味ではないかと思ふのです。どういふ風にするかと言へば、例へば一つの相続税にしても、相続税を拂ふことはこれは當然であるから、これを拂ふことについては兎や角言ひませぬが、假に住友なら住友、その他大きなもので納める場合がどこにでも起りますから、さういふ場合に、例へば五十萬圓、百萬圓の相続税を納めたら、その機會に、それを以て一つの仕事をして貰ひたいと思ふのです。例へば病院、學校を建てる。或はその他の社會施設をして、出した人の一つの名譽と言ふといかぬが、その人の名を出して、その人の氣持を満足させることであります。取るには取るが、それが國の普通收入に入つて何になるやら分らぬといふことでなしに、それが若し纏つたものなら、それによつて何か社會施設をするとしたら相當纏つた仕事が出来ます。普通の場合は、豫算は取つ

てもなか／＼出来ませぬ。外國あたりは大學に行くと、何々ホールと言つて人の名を付けて寄附者の名譽を表彰し、同時に、その人の氣持を満足させるといふ方法をとつてゐるやうであります。日本でもさういふことをするのがいいんぢやないかと思ひます。

この間もかういふことを厚生省で言つたことでもあります。この頃人的資源だとか國民の體位向上だとかと喧しく言つて居るのに、費用が十分でないから思ひ切つたことが出来ぬと言つて居ますが、をかしいぢやありませんか。私は農林省に居りましたからよく知つて居りますが、日本の馬を改良しようといふことで競馬が始まりました。さうしてどうですか、初めは射倖心をそゝる虞れがあるなど一部では非難の聲もありましたが、今日、馬券の賣上げが一年に一億五千萬圓もある。さうしてそれは何のためかと言へば、馬を改良するためであります。馬と人間と、どちらが大事であるか。馬を改良するにはさういふ途があるのに、人間を良くするために何かをやつちやいかぬといふことはをかしい。人間より馬の方が高い所もあるが、兎に角馬の改良のために相當の金が使はれるなら、人間の改良にはもつと多くの金が使はれてもいい筈であります。馬券を許したら、人券といふのは

よくないが、つまりさういふものも出せない理由はない。どこでするかと言へば、それは野球と相撲がよろしい。野球や相撲は全體の向上にはならぬと言はれますが、相撲や野球に對して馬券のやうに賭けさせる。さうしたら、そこから相當の収入があがります。先づ第一に、其の甲子園の野球に賭け切符を賣つてそれを買はせたら、それだけででも恐らく年に何億何千萬圓は集りませうから、それを全體の人間の身體の良くなるやうに、例へば結核の撲滅にでも使つたら、それだけでもその施設が早く出来て、今年は豫算が足らぬのでベッドも多くは出来ぬなどと、蒼い顔をして居る必要はなくなるわけであります。馬は何もしなくても長い顔をして呑氣に構へて居りますが、兎に角人間には、もつと金をかけて改良したらよろしい。しかし、かういふことを言つたら役人は嫌ひます。政治を面白分に考へて居ると言ひますが、大體政治といふものは、そんなにこち／＼したものであつてはならぬといふのが私の平素の考へ方であります。縮めるところは大いに縮めるべきですが、もう少しゆとりを持たせなくてはならぬ。生きた人間を對象にして行くのでありますから、その點はもつと自由に考へていいぢやないかと思ふのであります。

近頃方々で困つて居る問題は、中小業者の轉廢をめぐる、商業者の問題であると思ひます。これは、今申上げた科擧者と實際經濟人の問題にも關聯があります。この經濟方面の工業・商業をやつて居る者の、農業も同じ立場であります。所謂營利、利潤の追求といふことであります。これは、現在の政治から言つたら許されぬ傾向にあります。それは全然許さぬかといふと、許さなかつたら廢めるより外に仕方がないから許さぬわけには行かぬ。そこで、何やら妙な空氣が漂つて居るのではないかといふ感じを持つのであります。最近或る人が商業報國隊の話をしました。商業報國隊といふのは、商業者が集つて報國運動をやるのださうである。そこで私は、商業者の報國運動といふのはをかしいぢやないか。本當から言ふとさういふことをやるならば、寧ろ利潤の追求だとか、儲けるとかといふことをもう少し控へてくれたらよい。勿論報國運動も結構だけれど、その方を、つまりその報國精神で以てやつて貰つた方が、買ふ方に取つても非常に有難いぢやないかと言ふと、それは困るんだ。儲ける方は相當に儲けて、さうして報國運動は報國運動でやるんだ、とかういふのです。これは今のところはそれでいいでせうが、何やらかう奥歯に

物の挟まつたやうな變な感じがするのであります。

これは少し悪い例かも知れませぬし、既にお聞きになつて居るとも思ひますが、むかし軍隊に鐵詰を納める人が、鐵詰の中に石を入れて納めた。戦地の兵隊さんが鐵詰を開けたら、肉もあつたが石もあつた。兵隊さんは鶏ではないから、石を喰へなくても消化が出来ましたが、さういふものを納めて利益を得た人が、何か國家に功勞があつて大變に褒められたといふことになるのでは、誰でも一寸、それでよいのか知らといふ疑問が起ります。どういふ手段で金を儲けても、一方で獻金さへしたら國家に功勞をつくしたことになるのだとなつたら、かなりそこに、他の人が聞いたら變だと思ふ點があると思ひます。勿論商業家は、儲けなければ立ち行かぬ。商賣は第一は儲けることであるから、儲けることを否定したら商賣にならぬことは分つて居りますが、と言つて、それにのみこだはつたら非國民のやうになつて困るのであります。それが又市場を擾亂し、延いては消費者を困らせる原因にもなるのであります。それならばそれをどうしたらよいか。所謂生活の手段として或る程度の利潤は認めて貰ひ、又それによつて國家にも御奉公が出来るといふやうにす

そのには、どういふ組織、どういふ仕組みにしたらよいか。これについては、既に學者の方がいろ／＼と御研究になつて居られると思ひますが、さういふ方法を一つ何とか考へて頂いて、實際事業に従事して居る方々にその行くべき道を指示して頂くことが必要であると私は思ふのであります。

また政治の話になりますが、元來政治といふものは、先程も申しましたやうに人間の本能を無視して成り立つものではありません。然るに、動もすれば人間の本能を無視したやうな政治が行はれる虞れがないでもない。例へば、所謂役所の机上で以て空論に近い理論がでつち上げられ、その理論を基にして計畫が立てられるといふやうな場合には、どうかすると人間の本能を無視した、實際生活に即應せぬ政治、政策が行はれる場合が少からずあるやうに思ふのであります。これは非常に注意すべきことではないかと思ふ。人間はいろ／＼な欲望を持つて居ります。或は資産の増加を計りたい、幸福な家庭をつくりたいといふやうに、人間の持つて居る欲望にはいろ／＼ありますが、それらを一つ／＼取上げる必要は勿論ないけれども、さうした本能を無視して行はれるところの政治といふものは、

それは本當の政治ではないやうに思ひます。それで、役所で以ていろ／＼我々の生活に關係したことを決める場合には、ただ役人だけが集つて立案をするよりも、一應は各界の権威者、又は實際家、その中には臺所の實際家である婦人方の意見も参考にして立案すべきである、といつも私は言つてゐるのであります。

又、よく世間には、俺は政治はやらぬ、政治には關係はないと仰有る方がありますが、政治といふものは、或る學者も言つて居りますやうに、所謂精神と物質とが渾然一體となつたものでありまして、精神だけ、若くは物質だけではその全部ではありません。それでは半分づつ、つまり精神方面から言つても半分、物質方面から言つても半分でしかなく、物質と精神の両面から行かなければ全體の解決にはなりません。さうしてその兩方面の綜合といふか、接觸といふか、これが即ち政治であります。政治に於て初めて物質と精神が調和され、融合され、そこに本當の目的全體が解決せられるのであります。さういふ意味から言へば、俺は政治には關係せぬと言つても、總ての人は、やはり間接には政治に關係してゐることになるのであります。言ひかへれば、政治に關心を持たずして社會生活を

營むことは出来ぬと同時に、あらゆる問題も解決することは出来ないといふのが、誤りのない意見であると考へま。

さて、このたびの大東亞戦争は、申すまでもなく長期戦たるは必至でありまして、長期戦は又、畢竟文化戦であります。わが皇軍の武力は、御稜威の然らしむるところとは申しながら、緒戦以來洵に感謝に堪へない戦果を擧げて居りますが、我々は、この武力戦につづくべき文化戦に於ても亦必勝を期さなければなりません。この意味におきまして、今回かうして科擧、經濟の學問をして居られる方々と、經濟上の實際の仕事に携つておいでの方々との間に一つの結びつきが出来ましたことは、非常に意義ある結構なことだと思ひます。先程から申上げて居りますやうに、學者と實際家とが緊密な諒解と連絡によつて、眞に一團となつて働くことが出来ましたならば、必ずや内外共に十分な働きが出来るであらうと信じて居ります。私自身は、勿論何のお役にも立ちませぬ。私はただ兩方の間に立つて、糊か膠の役をつとめるだけでしかありませんが、皆さんの御協力をお願いして是非ともこの會を立派なものに仕上げ、この未曾有の國難打開と大東亞共榮圈の建設のために、

十分御奉公の誠をつくしたい、このやうに私は、心から念願して居る次第であります。

(十七年三月二十八日大東亞科擧經濟研究會に於て)

演壇から マイクから

一ばん初めに、演壇からする講演とか演説とかいふやうなものと、ラヂオの放送といふものの違ふ點について考へて見たいと思ふのですが、話すといふことから言へば、演壇からするものも放送局のマイクの前でするものと同じなんですけれども、ここに非常に違ふ點が二、三あると思ふのです。

その一つは、講演といふやうなものは、それを聴く方の側から言ふと、聴くといふことと同時に見るといふことがあるのですが、放送は聴くといふことだけで、決して眼で見るといふことはない。この相違は、ちよつと何でもないやうですけれども、實はその結果にかなり大きな影響があるので、例へば講演の方であれば、講師が話の途中で汗を拭くとかコップの水を飲むとかして、そのために一分なり二分なりの間があく場合があつても、聴

いてゐる方ではその動作の一つ一つを見てゐるんですから、さう間があいたといふやうな感じは持たないわけです。ところが放送の場合ですと、同じさういふ場合でも、講師が何をしてゐるのか、聴いてゐる者には全然見えませんから、たとへ一分でも二分でも話が途切れるといふと、どうしたんだらうといふやうな疑念が起つて来る。これは、一方には見てゐるといふことがあり、一方にはそれがないといふことから来る相違であると思ひます。

それから講演では、聴衆の數といふものは大體一定してゐて、時には二、三十人といふやうなこともあります。普通は五、六百人から千人位で、少し大きな会場ならば三千人位集ることも珍らしくはありません。けれども、講演の場合の聴衆の數としては、大體それが最大限度であると思ひます。ところが、放送の方は、全部聴いてゐるとしたら非常な數になります。更に、聴取者として判つてゐる數の外にその周囲の人達の數も加へれば、それは實に大へんな數に上るわけがあります。そこで、この放送をする人達がよく錯覺を起すんですが、つまり聴取者の數が非常に多いといふことから、ついその大勢の人を前に

置いて演説をするんだといふやうな錯覺に陥つて、無暗に大きな聲を張り上げたり、演説口調になつたりするんです。しかし、よく考へて見れば分ることですけれども、放送といふものは、ラヂオを中にして、一人と一人が向き合つて話をしてゐるわけでありませう。中には或は五人、十人と一緒になつて聴いてゐることもありませうが、さういふ場合でも、結局は對談といふ形になつてゐるんです。これが、講演などのやうに、眼の前に大勢の人を置いて話をするのと、放送との非常に違ふ點であると思ふのです。

それから講演の場合は、私はなるべく原稿はない方がよいと思ふのですが、しかし放送の場合は、原稿があつても差支へない、いや、ある方が當り前だと思ひます。それは、さつき申したやうに、講演の場合はみんなが見てゐるんですが、原稿があると、とかくその原稿に捉はれて下ばかり向いてゐるといふやうな結果になる。さうなると、自然話に力がなくなつて、聴いてゐる者の感じも非常に悪いですから、講演の場合の原稿はなるべく題目だけ位にとどめて、内容まで一々詳しく書いた原稿は持つてゐない方が本當だと思ふのですが、放送の場合は、勿論聴いてゐる者には全然見えないんですから、たとへ原稿を前

にして話をしてゐても一向差支へないんです。ただその場合には、原稿の朗讀にならぬやう注意することが大切で、これは講演の場合も同じですが、あまり原稿に頼り過ぎると、とかく話といふ風にならないで朗讀になる虞れがありますから、餘程注意が必要だと思ふのです。

もう一つ、講演の場合は、時間が、少し位伸びたり縮まつたりしても、大して問題にはなりませんけれども、放送の場合は、たとへ一分でも超過してはならないし、また餘してもいけないんですから、さういふ意味から言つても、放送の場合は、その時間に照らし合せて、きつちりとした原稿を持つてゐるといふことが必要であると思ひます。

このやうに講演といふものと放送といふものとは、一方は、聴くといふことと同時に見るといふことがあるが、一方はただ耳で聴くといふだけのものであるといふところから、自然そこにかういふ相違が生じて來るのであります。従つて話をする人は、これらのことをよく注意してやらないと、どちらもいけないんぢやないかと思ふのです。これを先づ初めに申して置きます。

そこで、第一は言葉ですが、この言葉といふものは、講演の場合はさして問題にはならぬやうですが、放送の場合となると、これは非常に影響するところが多いと思ふのです。一口に言葉といつても、東北地方で使はれてゐる言葉や、九州あたりの言葉、また關西地方の言葉などは、同じ日本の言葉とは言ひながら随分相違の甚だしいものがあります。私がここでいふ言葉といふのは勿論さういふ意味のことを言ふのではないので、つまり日本語全體についてのことなんです。一體日本の言葉には、澄んだ音といふものが多い。そして、力の入らない音が割合に多いんぢやないかと思ふのです。

例へば獨逸語などと比べて見ると、殊にさういふ感じがするんです。これは私だけの感じなのかも知れませんが、一ばんはつきり聴えるのは濁音のついたものだと思います。つまり、ガギグゲゴとかダヂツデド、それからバビブベボなどですが、この濁音が入つてゐる言葉といふものは割合にはつきりもしてゐるし、力も入るのだと思ひます。その次にはつきりしてゐるのはカキクケコ、タチツテト、それからラルルレロ、この三つの行ですが

もう一つ、これは何と言ひますかバビブベボ、この四つの行の音が割合にはつきり聴えるんぢやないかと思ふのです。その次はマミムメモ、ンですが、一ばん終ひのン、これが割合にはつきり聴えるやうであります。

一ばん聴きにくいのは、アイウエオのア行、サシスセソのサ行、それからナ行のナニヌネノ、ハ行でハヒフヘホ、ヤ行のヤキユエヨ、それからワ行のワイウエオ、かういふのは非常に力も入らないし、また不明瞭な場合が多いやうに思ひます。

それから、例へば數の場合にしても、日本は、一とか二とか三とか四とか五とかいふ風に言ひますが、これを獨逸語のアイン、ツアイ、ドライ、ヒーア、ヒュンフといふのと比べて見ると、たしかに日本語の方は音が澄んでゐて、はつきりした音が非常に少い。つまり、音が明瞭でないと思ひます。これについての一ばん手近ない例は、私達が日常使用する電話です。この頃では殆んど自動式と言ひますか、あれになつたので、さういふこともあまりなくなりましたが、以前はみな何番々々と交換手に番號を言つて、呼び出して貰つたものです。ところがこれは非常に間違ひが多くて困つた。番號の聴き違ひなんです。

日本語の言葉が聞き取り易いといふことは、かうした點からでもよく分ると思ひます。これはどうすればよいか、今申上げることが出来ませんけれども、とにかく、紛らほしい言葉はつとめてさけて、なるべく聞き取り易い言葉を使ふ、といふことが第一の方法だと思ひます。

もう一つは、日本の言葉では、同じ發音、同じ言葉でも意味の異つたものが非常に多いといふことです。一つの例を申して見ますと、ハシといふ言葉ですが、これは御承知のやうに渡る橋にもなるし、物を食べるための箸にもなるし、また机の端といふ時の、あの端にもなる。同じハシといふ言葉で、こんなにも異つたものを言ひ現はしてゐる。まだかうした例は他にいくちもあると思ふのですが、しかし、それにしても、さういふことのためいろいろの間違ひが惹き起されるといふ原因は、要するに日本の言葉には、アクセントといふものがつきりしてゐないからだと思ふのです。

同じハシといふ言葉ではありませんが、渡る橋、物を食べる箸、物の端つこの端には、そこに當然發音上の相違がある筈であります。これは一つの例に過ぎませんが、かういふこ

とが日本全體を通じて統制され、正しく行はれるやうになるといふことは、現實の問題としてなかく困難な話かも知れませんが、これをこのままにして、いつまでも打ち棄てて置いていいものであるとはどうしても考へられません。今少し何らかの方法が考へられてもいいんぢやないかと思ひます。話が傍道へ外れましたが、とにかくアクセントがはつきりしてゐないといふことが、非常に誤られ易い原因になつてゐるといふことは確かだと思ふのです。ですから講演でも放送でも、所謂標準語でやるといふ風にして行けば、第一聞き取りがないばかりでなく、すべての人によく理解され、従つて、よりよき効果が期待されることになるんぢやないかと思ふんです。

その次は、言葉の中の方言であります。これは私は、必ずしもいけないといふんではありません。方言で言ひ現はすことが、非常にその内容とびつたり合つて有效な場合も確かにあるのですから、一般にどうかと言ふことは出来ないと思ひます。けれども、どうかすると、その方言が一般に分らないといふか、理解することが出来ないといふやうな場合もまた多いんぢやないかと思ふんです。この方言の問題は、小説でもさうだし、演劇などで

もよく問題になつてゐることで、方言は、要するにその感じと言ひますか、雰囲気と言ひますか、つまり、さういふものを現はすのに役立つてゐるわけですから、そのために却つてその内容が明瞭を缺くといふやうなことになるつては意味はないんで、方言の使用も、當然、そこにある程度の考慮が拂はれなくてはならないんじゃないかと思ひます。

それから、これもやはり言葉についてですが、講演でも放送でもさうですけれども、特に放送の場合には、言葉がはつきりしてゐるといふことが非常に大事だと思ふのです。まあ普通の對談の場合でも、言葉が明瞭でないといふことは、すべての點に於て支障を來す原因になるものですが、放送の場合は、何としても耳だけで聴くものなんですから、一層さういふ感が強いわけです。實際、ラヂオを聴いておいでになる方は感じて居られると思ひますが、例へば、アナウンサーの放送は非常に言葉がはつきりしてゐて、相當早い速度で話をしてもよく分ります。ところが、地方の人の話などになると随分不明瞭なことが多い。早ければなほ餘計分らない。ですから、これはまあ方言ともかなり關係があるし、地方の人にとつても難しい問題ですが、國民學校などで讀方を教へる場合には、かういふ點

も大いに注意しておく必要があるやうに思ひます。

もう一つは抑揚であります。言葉の上げ下げといふことです。これもまあ地方々々の習慣といふやうなものによるんでせう、随分變つた言ひ方や話し方があるやうですが、時々非常にかう抑揚のない、平坦なもの言ひ方があります。けれども講演などの場合、あまりこの抑揚といふものがなさ過ぎると、聴いてゐる者は倦いて來る。聴くのに聴きづらくなると思ふのです。ですから、前に申しました一つの言葉のアクセント、それからこの、講演なり放送なりの全體の上の抑揚といふものも、非常に必要だと思ひます。

その次は、聲の高低、大小といふ問題ですが、これはその各人の生れつきのものなんですから、特別な音楽家であるとか、俳優であるとかといふんならどうかなるんでせうけれども、先づ普通の人としては、調子の高い人は高いし低い人は低いんで、どうにもならないのであります。しかし、どうにもならないことではありますけれど、このことは、講演でも放送でも、その内容とかなり深い關係があると思ふのです。といふのは、ある内容によつては、極く低い音で——低い聲で言はなければしつくりしなくてをかしいといふ場合

があると思ふので、例を擧げて申上げると、例へば靖國神社の大祭の放送などの場合ですが、あゝいふ場合に、妙に肝高い調子で放送をしたんでは、あの莊重な森嚴な感じは全然出ない。しかしこれが反對に、野球や角力などの實況放送が、あの落ちついた低い聲でされたんでは、これまた、あの白熱した空氣や情況といふものを十分に傳へることは出来な
いと思ひます。ですから、つまり話の内容とその音聲とは非常に關聯があるんで、高い聲
の人が低い聲を出すといふことは不可能なことですから、その場合々々によつて、あ
る程度調節をとつて行くといふことはどうしても必要だと思ふのです。

また、例へば話の始め、中頃、終りといふ風に區別するとか、或は非常に力を入れる場
合とか、一つの話の中にも、その時その時によつて或は高い聲を使ひ、或は低い聲を出す
といふ必要もあると思ひます。商賣人の話を聞いてさういふ感じがいたしますが、落語な
んかでも、最初は非常に低い聲で話をはじめ。それは、人の注意を惹きつけるといふ意
味があるんだと思ふのです。がや／＼してゐる時には、大きな聲を出さなければみんなに
聴えない。

しかし大きな聲を出すことは、却つてさういふ場合は効果のないもので、反對に低い聲
ではじめると、何か言つてるぞといつたやうな工合でみんなが靜かになるといふ、心理的
な機微を狙つたものだと思ふのですが、つまり講演の場合でも放送の場合でも、その話し
方や話術といふものを技術的に、時には高い聲で、時には低い聲でといふ風に、適當に按
配するといふことが必要だと思ひます。

また、聲の大小についても同様です。講演の場合には相當大きな聲を出さなければなり
ませんけれども、放送の場合などは、前にも申しましたやうに實際は對談なんです。さう
いふ場合に、あまり大きな聲をするといふのはどうかと思ひます。ですから、この聲の高
低とか大小とかいふことは、講演の場合にも放送の場合にも、よく考へる必要のあること
と思ふのです。

第三は速度についてですが、これは、講演の場合も放送の場合も同様ではありませんが、
多少はそこに違ふ點もあると思ひます。放送では、大體一分間に二百字といふのが一般の
基準になつてゐるわけなんです、アナウンサーなどは放送に馴れてゐてうまいし、言葉

も非常にはつきりして居りますから、従つてある程度早くつても、聴く者にはよく分る。けれども普通の人では、一分間に二百字といふ程度が、やはり一ばんいいと思ひます。

しかし、場合によつては多少はゆつくりしたところもあつていいと思ひますし、また明瞭を缺かない程度で早く話すといふことも、話術の上から言つて、やはりしなければならぬと思ひます。始めから終りまで同じ速度でやつて行くといふことは、何かかう機械的な感じになつて、結局は聴いてゐる者を倦きさせることにもなるんですから、これまた、そのところを適當に織り交せて行くといふことが、聴衆の心を捉へて行く上に於ても必要なことと思ふのです。

それから四番目には、時間の問題です。この時間といふのは話す時間のことですが、これは、講演と放送とは非常に違ひます。講演などでは、まあ適當な話があれば、一時間位では必ずしも長いとは思ひません。私などは、普通一時間半位が一ばん話しいい。先づその位の時間ならば、どうやらさうがやがやさせないでも出来ると思つてゐるんですが、中には非常に長い話をだら／＼する人があつて、いい加減にやめて貰ひたいと言ひたいや

うな話を何時間でも止めないといふやうなこともあります。大體講演ならば一時間、長くつて二時間位が適當な時間であると思ふのです。

ところがラヂオの方になると、これはやはり、耳だけで聴いてゐるんだといふことが原因すると思ふのですが、時間は非常に短かく、以前には四十分といふ放送もあつたやうですが、近頃ではどんな話でも、三十分以上といふことは殆んどありません。外國あたりでも大抵さうらしいやうですが、若しあつても、それは特殊な人の特殊な場合で、普通十分か、せい／＼二十分といふ程度になつてゐるやうです。それは、これが講談とか落語とか或は浪花節とかいふやうな演藝放送なんかで、一般が興味をもつて聴くといふものならば別ですが、所謂講演といふやうなものだつたら、長い時間聴取者を引つ張つて行くといふことはなか／＼出来ないからなんです。そこで、大體十分、二十分程度が頃合ひとなつてゐるんですが、それでもまあ、中には聴いてゐられないやうなまづいのもあるやうです。から、時間は出来るだけ短かくするのが當り前だと思ひます。

それから、第五番目は話の内容ですが、これは無論、講演や演説にも大切なものには違

ひありませんけれども、放送の場合は、格別その内容といふものが大事だと思ふのです。私が放送をよく致しました時分に、あなたは原稿はもつてゐらつしやらないんでせうと言つた人がありました。それは私の放送する話の中に、時々意外に思はれるやうなことが飛び出したりするんで、何か口から出まかせに喋舌つてでもゐるやうに思はれるからなんでせうが、しかし私の話は、決してその場その場の出まかせではなく、ちゃんと原稿になつてゐることを喋舌つてゐるんです。そして私は、時間にもきつちり合せてその原稿を作つてゐるんです。ですから私は、その原稿の通りに、謂はば讀んでゐるだけなんで、まあ話してゐるとでも言へませうか。それ以外のことは一言といへども、その場で考へたり附け加へたりなどしてはゐないんです。それでその時も、私はその人にさう言つて御返事したんでしたが、大體放送などのやうに、時間がきつちりしてゐてどうにもならないといふやうな場合には、變なことを言ふやうですけれども、原稿そのもの、つまり話の原稿なんです。それがよくなくてはいけません。いくらうまく話をしようと思つたつて、原稿が悪かつたら、いい話が出来る筈はない。だから放送がうまいといふことは、つまりはその人の

持つてゐた原稿が、書いたものとしてもいいものであつたわけなんです。

しかし、書いたものと言つても、人に讀んで貰ふために書いた論文だとか、小説だとかといふものと、人に聴かせるために書いた原稿といふものとの間には、これは自ら相違があるものです。相違はありますが、しかし今申したやうに、やはり話す場合でも、話のものとになる原稿といふものは、書いたものとしてもいいものでなければ、放送したつて決してよく聴かれるといふことにはないと思ひます。

私はこの間、ある人にお話したんですが、書く方のものには隨筆といふものがありますけれども、話すものにも隨談といつたやうなものがあつていいんぢやないか。隨談などといふ言葉がいいかどうか分りませんが、とにかく私は、さういふものもあつていいと思ふんです。つまり講演や演説といふやうな形式とは違ふし、かと言つて所謂漫談でもない。書いたもので言へば隨筆に當る、さういふものがラヂオの放送などのうちにも相當ある。隨談といふ言ひ方はをかしいかも知れませんが、それがつまり、さういふ風な言ひ方ではれるものだと思ふのです。

その次は配列、つまり話さうとする事柄の並べ方といふことですが、この配列といふことは、内容といふことと同時に非常に重要なことだと思ひます。そしてそれは、講演の場合も勿論ですが、放送の場合には殊に大事だと思ふ。つまり意見であるとか實話であるとか、さういふものを適當に織り交せて行くといふことなんです。それは講演なり放送なりの時間の長さにも関係がある。それはどういふところから來てゐるかと思ひますと、一つは、すべてのものを通じて言へることですが、聞いてゐる人達に、どうしたら倦きさせないでよく理解して貰へるか、熱心に聞いて貰へるかといふことがその重點になつてゐるんです。そのためにいろいろ苦心するといふことになつてゐるわけなんです。つまり、意見なら意見があまり長く續いて人が倦きさうだと思ふと、少し方向をかへた話だとか、或は實話だとかを挿んでまた意見を述べるといつた風に、勿論、その内容である論旨は一貫してあるべきですけれども、そこを適當に織り交せて行く。それが若し短かい時間ならば大して問題はないんでせうが、相當長時間を持ちこたへて行く上に於ては、どうしてもこれはやらなければならぬと思ふのです。

殊に一ばん大事なことは始めですが、最初の出方があまり紋切型で退屈だといふと、あとが如何に面白くても不成功に終つてしまふことが多いと思ひます。講演の場合などでは始めは少し退屈でも我慢して聴くといふことがありますが、放送の場合では、なんだ面白くないぢやないかとスキツチを切つてしまへばそれつきりで、あとで如何にいい話をして相手も聞いてゐてくれない。それでは折角の話が意味をなさぬ結果になつてしまふ。ですから、とにかく先づ最初に人を惹きつけてしまふといふことが必要であります。

例へて言へば、最初にくどくどしく前口上を言つたり、官廳式の「——最も欣快とする次第である」式のことを言つたりする人がありますが、それは止むを得ない場合もありますけれども、とにかくこれは決してうまい方ではないと思ふ。さういふ點から考へますと私は、放送などの場合は時間が短かいんですから、一ばん初めに、何かみんなの耳を傾けさせるやうな興味のある話なり實話なりを、二つ三つ續けて行く仕方がいいんぢやないかと思ふんです。そして、どんな内容の話でも、長くつづいたりすれば多少はゆるんだり、かけ離れたりするものなんですから、言ひたいことはなるべく始めのうちに聴かせるとい

ふやうにして行くことが大切なんです。これを私は配列といふのですが、講談や落語などを聴いてゐましても、最初に無駄口を利いたり、人を惹きつけるやうなことを言つて始めて行くのはそのためだと思ひます。

それから、これは放送の場合には問題はないことですが、講演などの場合、話をする人の態度についてであります。これは、先程も申しましたやうに聴衆の眼の前でするんですから、放送のやうに耳だけに訴へるのとは違つて、話す方からいへばかなり有利であり、また樂でもあるんですが、その代りみんなの眼が集つてゐるだけに、その態度なりしぐさなりといふものが、話の上に非常に影響する。例へば、話はよくつても話す人の態度が悪いといふと、その方から来る印象によつてその結果が悪くなる、といふやうな場合がかなりあり得ると思ふのです。

この頃はあまり見かけないやうですが、以前にはよく、演壇をあちこち歩きながら話をする人があつた。よく外國あたりではさういふことをやるやうですから、さういふのも一つの型なのかも知れませんが、これは非常に悪い態度ぢやないかと思ひます。つまり、聴

いてゐる者に不眞面目な感じを與へることになつてよくないと思ふのです。また、あまり大仰な身振りや手眞似なども慎しむべきで、落語や講談などならばともかくですが、眞面目な話をするんですから、あまり固苦しい感じを與へない程度にきちつとして、その話の内容に相應した、極く自然なポーズをとるやうに心懸けることが必要です。殊に、聴衆の中に女や子供が多いと、その話をする人の格好などから、ぢきに笑つたり願いだりするものですから、態度といふものも、講演の場合には非常に大事であると思ひます。

それから、私達が自分で感じますことは演壇の高さですが、この演壇の高さといふものはどういふわけか非常にまち／＼で、会場によつて随分高いのがあるかと思ふと、反對に非常に低いのがあります。演壇の高さといふものは、大體日本人の背の高さを基準にして定めるべきぢやないかと思ふのですが、私の今までの経験から申しますと、貴族院、衆議院の演壇は非常によく出来てゐると思ひます。そして、あれが本當に日本人の平均身長から割り出した高さといふものぢやないかと思ふのであります。私など講演をする場合に、一ばん困るのは高過ぎることですが、例へば、軍人會館のテーブルは非常に高いんです。

あゝいふのでは、どうも自分の手の持つて行場に困る。従つて、態度がどうしても不自然になるといふ結果が生れて来る。ですからこれらのことも、當事者はただ建築家にのみ委せてしまはずに、いろんな人達から意見を聴くといふことが必要ぢやないかと思ひます。そして、誰にでも話しいやうな會場を作るべきぢやないかと思ふのです。

次は聴く方の側についての話ですが、由來、話上手といふものと聴き上手といふものがあるんですが、日本人には、話上手といふ人は割合あるやうですけれども、聴き上手といふのは少いやうに思ひます。これは講演會などで、聴衆が大勢集つた時なんかはそれがよく現はれると思ふんです。かう申しますと、その話が面白ければ聴き上手にもなれるだらうけれども、話がまづければ、聴き上手にならうとしてもなれないんぢやないか、といふ人があるかも知れません。事實話がまづければ、聴衆にしたところで、どうもさう行儀よくばかりしてはゐられなくなるでせう。しかし、たとへまづい話にしろ、とにかく話をしつゝゐる人は、それでも一生懸命になつてやつてゐるわけなんですから、その點を聴く方もよく考へて、なるべく話がうまく出来るやう、つとめてその話の邪魔にならぬやうに

氣をつけるといふことが、その講師に對する禮儀でもあるし、また、聴き上手といふことの一つでもあると思ふのです。

ところで、この聴衆といふものにもいろいろ種類があります。何と言ひますか、義務的に集められた聴衆といふのは、誰々が講演に来るからといふので、お役所なり團體なりさういふものが多少無理に人を集めたといふやうな場合のことですが、これは、一般の人の自由意志で、あの人の話を聴きたいといふので集つた聴衆とは、大分違ふ。そして、さういふ義務的に集められた聴衆に話す話といふものは、どうも力が入らない。本當の話にはならぬ。勿論その場の雰囲気にもよりますが、どうしても話す人、聴く人の氣持がびつたりと一つになるやうでなかつたら、本當に力の入つた話といふものは出来ないと思ひます。

その點から言へば、ラヂオの放送といふものは非常に公平なものなんで、講演の場合なんかでは、無理に引つ張り出されれば、面白くないと思つても聴いてゐないわけには行かぬ。睡くなつても我慢して聴いてゐる。だからその講演は、たとへまづい話でも、無理に

人に聴かせるといふことが出来るんですが、放送の場合だといふと、相手が聴かうと思はなければ、何時でも止めてしまふことが出来るのです。従つて、話してゐる人が相當上手な人で、またその話も面白いといふものであつても、案外聴いてゐる人は少いといふ場合もあり得ると思ひます。しかし、それではラヂオ放送の値打といふものはないわけですから、どうしたらみんなに喜んで聴いて貰ふことが出来るかといふことについて、話す人は大いに研究もし、修練も積む必要があるんだと思ふのです。

聴衆で一ばん困るのは、ただ人を集めようとして、老幼男女の別もなしに雑多な人を集めたといふ場合ですが、そんな時には、演壇に立つても暫らく口が利けない。放送の場合でしたら、恐らくはそれ以上に雑多な人が聴いてゐるんでせうけれども、それは全然眼に見えないんですから少しも動搖の原因になりませんが、講演の場合さういふやうな時にはこれは全く困るものです。さういふ場合に、どういふ話し方をすれば、さうした種々雑多な人達を倦きさせずに、相當長い時間うまく話をする事が出来るか。これはまあ、餘程苦心をしなければならぬところで、それについての工夫といふものは相當必要であると思ふのです。

ふのです。

その次は彌次ですが、これは、講演や演説などの場合だけで、放送の場合には全然關係のないものなんです、演壇に立つて居りますと、聴衆がたとへ千人あつても二千人あつても、不思議に殆んど全部判るものです。ですから、どこで誰が居睡りをしてゐるとか、あそこで人が笑つたとか、どこで話をしてゐるとかといふやうな、さういふ聴衆の動きも演壇の上から見てゐると、實に愉快なほどはつきり判る。それだけに、さういふことが、話をする者の心理にいろんな影響を與へることもあるわけなんです、あまり感じのない人もあるやうですけども、私などは特にさういふことには敏感なんです。従つて、さういふことも人一倍氣になり、よく眼にもつくといふわけなんでせうが、しかし、だん／＼い／＼らかは慣れて来て、近頃では餘程氣にもならなくなつて来たやうです。

ところで、さういふ場合に何が一ばん困るかといふと、居睡りなどは大きな軒をかかれたりしては困りますが、それでさへなければ大して邪魔にはなりません。けれども、笑ふといふこと、それもこつちが、何か面白いことを言つたりした場合に笑つてくれるんなら

結構なんですが、大して面白い話もしないのに笑ふといふのは、これにはかなり嫌な感じを受けます。特にそれが隣り同志で話し合つたりしてゐて、さうしてこつちを見ては笑つてゐるといふのなんかは、非常に嫌な感じを受ける。にや／＼笑つてゐる。くす／＼笑つてゐる。これは、とにかく愉快なものではありません。恐らく誰にしたつてさうだらうと思ふんですが、話をして行く上に非常に影響を與へるものだと思います。勿論これらは、格別悪意をもつてやつてゐるのではないといふことは分ります。しかし、悪意なしにやることでも、それが人に嫌な感じを與へるやうなことは慎まなければならぬことで、これは何も、講演だけの場合を言つてゐるのではないんです。芝居や音楽や、落語、講談などを聴く場合でも、商賣人は割合馴れてゐるから平氣ではありますが、それにしても聴衆の一つの作法として、相手方に悪い感じをもたせるやうなことは努めて避ける、といふやうにしなければならぬものぢやないかと思ふのです。

それから、これは比較的固苦しい話の場合に多くあることですが、それは、話の半ばに席を立つて歸る人のあることです。これもまた、話をするものにとつて非常に話がしにく

い。これは一面、話をする人の方にも責任があることかも知れませんが、私の言ひたいのは、前の人の話が終つて次の人が演壇に立つて話を始めます。そして、まだ二分か三分しか経たないのに席を立つ人があるといふことです。私は思ふんですが、若しその人の話が聴きたくないならば、なぜ前の人の話が終つた時に歸らないか。さうすれば、話をしてゐる人にも、話の最中で立たれるといふ嫌な感じを與へないで済むし、また、熱心に聴いてゐる他の人達の邪魔にもならず済むわけだと思ふのです。これなどは、結局故意の妨害といふことになるのでありますが、非常に慎むべきことだと思ふのです。この頃では、講演中に席を立つて行く人で、講師の方へ一禮して出て行く人がありますが、これに對しては多少いい感じも持てますけれども、それにしても、出来るだけ話の最中には席を立たぬやうにするのが本當ぢやないかと思ひます。

彌次といふことから話が長くなりましたが、以前は政治演説には、なか／＼盛んに彌次といふものが出たものです。これは私は、他の彌次と違つて悪くないと思ふ。寧ろ今日でも、政治に關する講演なり演説なりには、多少の彌次はあつた方がいいんぢやないかとさ

へ思つてゐる位なんです。イギリス流の性の悪い彌次といふものは御免ですが、ある程度の彌次といふものは、話すものにとつて左程困る事柄ではなく、さつき申上げたやうなところの方が、却つて話しにくいと言つてもいいと思ひます。

これで大體話は済みましたが、今日、ラヂオ放送の中で一ばん受けてゐるのは、海軍の平出大佐ださうですが、全く平出大佐の放送の人氣といふものは大へんなもので、私なども實は缺かさず拜聴してゐる方なんです。話によると、ある方面では、平出さんの放送をお手本にして話し方の研究会みたいなのを拵らへて、研究してゐるといふことです。以前は永田秀次郎さん、太田正孝さんなどがうまいと言はれて居りました。なるほど、商賣人でない放送局の常連の中では、確かにうまいし、評判もいいです。それから、演説の方で言へば、例へば永井柳太郎さんとか、鶴見祐輔さんとか、中野正剛さんとかが代表的で、勿論この方達は放送の方にも関係がありますが、しかし、今一ばん問題になつてゐるのは平出さんです。

平出さんの放送を聴いてゐて、私が先程から申上げてゐることを當て嵌めて見ると分る

と思ひますが、平出さんの放送は、やはり内容だと思ひます。内容が非常に整つてゐる。そして、さつき申上げた、話であり放送ではありますが、餘程その原稿が、書いたものとしてもよく纏つた立派なものであり、更にそれを話として聴かせるその話し方も、それに劣らず優れてゐるからだと思ひます。つまりそれは、朗讀に墮さない、讀んでは居られるが朗讀に墮さないといふ點に、平出さんの御苦心もあるでせうが、非常にいいところがあつるやうに思ふのです。そして、聴いてゐる者を倦かせないで引つ張つて行くために話を適當に轉換させて行くその配列も、非常にうまく考へて居られるし、速度も早過ぎるやうなことはなく、言葉も非常に明瞭で、それから、演説をしてゐるといふんでなしに話をして居られる。しかも熱情をこめて話をして居られるといふこと、これが非常に重要な點であります。この點を若し平出さんが無視して放送されたとしたら、恐らくあのやうな効果はとてども收めることは出来ないに違ひないと私は思ふのです。とにかく放送は、所謂對談である。放送をする場合、どこまでもマイクを通して對談してゐるんだといふ氣持で臨むといふことが、非常に大切だと思ひます。そして、それらのことを考へてやつて行けば、必

ず相當な効果を擧げることが出来ると思ふのです。

それから最後に申し上げたいことは、放送員——アナウンサー——の放送を聴いてゐても感ずることですが、實にうまいと思ふのです。勿論玄人だからと言つてしまへばそれまでですが、とにかく放送員がこれまでに成るには、どういふ風にして訓練をし、研究をしてゐるのか、私にはそのことが、非常に興味深く感じられるのです。簡單でいい例は、いろ／＼な方の書いた隨筆、小説などもあります。主として隨筆を朗讀して居ります。あれを聴いてゐると、如何にうまいかといふことがよく分ると思ひます。それは、誰にでも簡單に出来ることではない。まあ、その人達の天分による場所も大いにあるでせうけれども、私はそこには、必ず、人に知られない苦心や努力のあることを思はずには居られないのです。

以上で、大體のアウト・ラインはお話したつもりですが、何故かういふことをここで言ふかと申しますと、私は最近、この話すといふことの重要さが、かなり多くなつて來たや

うに思ふのです。しかるに、書く方についての修練といふものは相當行き互つて居りますけれども、話す方については、相變らずあまり一般に関心が持たれてゐない。小學校——今は國民學校ですが——でも、綴り方といふものはありますが、話し方といふものは、少くとも今まではなかつたと思ひます。従つて、一流の學校を出て世の中で活動してゐる人達をみても、ものを書かせれば相當に書くといふ人はありますが、さういふ人に講演なり放送なりをさせたらどうかといふと、一般の人からこれはうまいと言つて感心されるやうな人といふのは割合に少いんぢやないかと思ふのです。それは、これまで話し方といふものがあまり重きを置かれてゐなかつた關係から、従つてまた、さういふ修練の機會も與へられてゐなかつたからですが、今後は益々話すといふことの必要が増して來る以上、話し方といふことについて、みんながアナウンサーのやうになる必要はありませんけれども、とにかく十分に研究をし、修練を積む必要があると考へるのです。

以上、話の上に於て感じたこと、また普段考へて居りますことを、少しばかり述べて見たわけです。

あとがき

書いたものを読んで面白かったといふて、それが話として聞いて必ず面白いときまつてゐないやうに、話で聞いて面白かったもの、必ずしも読んで面白いとはきまつてゐない。話は話として聞くべきものであり、文は文として讀むべきものである。

私がここ二年程の間に、或は演壇から、或は放送で喋舌つたことを纏めて本にするといふことは、さうした見地からすれば意味のないことだとは思ふが、しかし、書いたものうちがつて喋舌つたことは後に残らないので、何だか寂しいやうな氣もするので、無益とは知りつつ印刷にすることにした。

何時も感ずることだが、自分の書いたものや話したことが、本に纏められて出版されるときは、何だか嬉しいやうな、又恐ろしいやうな氣がする。しかし、どんな醜い顔をしてゐても吾子であれば可愛いやうに、どんなつまらぬものでも、自分の本となれば自然愛着

の心は湧く。といふて、一方には何やらきまりの悪いやうな気がしないでもない。しかし、アバタもエクボといふこともあるのだから、他人は何と批評しようと、自分だけ満足してゐればそれでよいのだといふことにして、憶面もなく、人混みの中を手を引いて歩くことにする。

時移り事變るといふことは昔も今もちがひはないが、殊に昨年十二月八日以来、世界も日本も非常な變化をした。従つて、それ以前に話したことの中には、今の世の中から見ると、その見方なり考へ方なりに、随分間違つたことがあると思ふ。それは當然のことでもあり、又止むを得ないこともある。どうかこの本を讀んでくれる人は、その點をよくわきまへて讀んでもらひたいと思ふ。

又、今の世の中を背景として見たり考へたりすると、どうしてこんなつまらぬことを喋舌つたのかと思ふこともないではないが、何れもそれは、その時代を背景としての物の見方であり、考へ方であることを承知してもらひたい。自分が考へたり主張したりしてゐたことが、若しその時に實現してゐたら、今日の時代に多少なりとも役立つて居たのではあ

るまいが、などと思ふこともないではないが、それも別に先きを見透してゐたとか、今日のやうな時代の來ることを豫見したなど、おこがましいことを考へてゐるわけでは決してない。

これは一つの話の記録に過ぎない。心覺えを印刷に附したといふに過ぎない。殊に大政翼賛運動に關するものは、翼賛會が發會に至るまでの経過なり、又それを廻つての日本の政治情勢を記述するものであつたら、我國政治史編纂の一資料となり得るかもしれないが、唯その折々の私の講演や放送を記録したのでは、大して役に立たうとは思はれない。しかし、経過を詳細に記述するといふことは、中々むづかしいことでもあり、又その時期でもないから、それは相當の時日を経過したとき、革めて又書くときもあらうと思ふ。

最後の「演壇から・マイクから」は、この本を出版するに當つて特に談話筆記をとつてもらつたもので、講演でも放送でもない。演説、講演、放送といふことが、時代の波に乗つて非常に世人の關心を深めて來たやうに思はれるので、自分の少い経験と浅い知識を本にして、つまらぬ考へを述べたに過ぎないのだが、これを機會に、學者、政治家、指導者

等あらゆる方面の有力者が、書くといふことと同様に、話すといふことにつきても、一段の研究を進められるやうになることを切望する。

昭和十七年十二月

有馬頼章

昭和十八年三月十日印
昭和十八年三月二十日發行

刷 (初版三〇〇〇部)

價一圓八十錢

著者 有馬 頼章

發行者 森下 才一郎

印刷所 富士印刷株式會社
(東京二〇三)
東京市小石川區西江戸川町二

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

有聲錄
(出文協承認あ 130028號)

發行所

東京市赤坂區青山北町四ノ六三

多

摩書房

電話青山三〇一〇番
振替東京一〇二一七四番
出文協會員番號一六〇二五番

多摩書房・新刊重版書

新福 田著 北滿のロシヤ人部落

北滿の寒地生活を娛しむロシヤ人の生活とその文化を語る好著
A5上製函入四三〇頁 三・〇〇

重木 村著 現代日本畫家論

現代日本畫壇の第一人者四十氏の畫業とその將來を論ずる快著
B6上製函入四五〇頁 三・八〇

麻次郎 著 ジョン・ラスキン

ラスキン研究に半生を費した著者の心血の勞作ここに漸く完成
B6美裝瀟洒四八〇頁 二・五〇

松原 著 先覺佐藤信淵

幕末の先覺佐藤信淵の人と思想を論じその現代的意義を闡明す
B6美裝上製三〇〇頁 一・八〇

善八木澤次 譯 獨逸大戦經濟論

戦時經濟に關する世界的權威たるグレブア博士の名著の完譯
B6上製函入二六〇頁 二・〇〇